325
378は

始

二1195
325-378 は

機禅

竹田黙雷述

大正
4. 12. 15
内交

正誤表

頁數	行數	誤	正
二	四	暇も無かつた	暇が無かつた
一三	一一	へこの先	へのこの先
二四	三	辭送識	轉送識
二六	一	ぶつといふのは	ぶつといふ字は
三六	六	命懸け絲の	命懸絲の
四〇	五	尻掛けた	腰掛けた
五二	九	洛東天龍寺	洛西天龍寺
五四	二	紅橋渡る下駄の音	カラカラ渡る日本橋
五六	七	蟇（ひきがへる）の目ぢや	蟇（かへる）の圖ぢや
五六	一〇	古巣へ蟇（ひきがへる）	古巣へ蟇（かへるかな）哉
六八	三	大覺禪師の下に	大覺禪師の會下に
七二	四	河野某	水野某
九六	八	江戸とし聞	お江戸と聞
九六	九	佐渡へ	出羽へ
九六	一二	雨傘を	から傘を

隨波逐浪

はしがき

此の書は、默雷老師會下の菰堂君が、親しく老師に就きて、聽き得たる活禪談を、蒐錄したるものなりしが、絕版年久しく、爲めに江湖求道の人に負くこと少からず。僕、頗るこれを遺憾とし、更に老師の禪話十數則を加へて、再び玆に上梓す。不言々々の妙諦、言ひ得て盡さゞるなく、不說々々の眞源、說き得て至らざるなし。その舌鋒鋭利、直に人間の皮肉を刺し、肺腑を刳る。正にこれ、眞禪機の暴露、若しそれ、禪海これより、狂瀾怒濤の起るあらば、蓋し、老師の本懷

なるべし。

大正四年十一月十日長くも
今上陛下即位の大禮を行はせ給へる日の夜
廣長舌莊の燈下に　高島米峰識す

目次

一　鐵舟と得庵……一
二　達磨西來の年代……四
三　瓢中の坐禪……一〇
四　白紙の艶書……一二
五　活ける東京人死せる西京人……一六
六　太鼓の音を描く……二二
七　花見客に放屁……二五
八　茶味と禪味……二七
九　細君を忘れる……三一
十　明末の禪風……三六

十一　極樂へ嫁入……三九
十二　一升徳利の公案……四四
十三　坊主頭に丁髷……四九
十四　夢窓國師と戀歌……五二
十五　本尊は美人……五八
十六　左邊底の故事……六二
十七　日蓮の禪機……六七
十八　何故これが圓い……七一
十九　蚤と虱の禪機……七三
二十　元亨以上の僧……八〇
廿一　坊主が社祢……八三
廿二　耳根圓通の三昧……八六

廿三　眞言宗の妻帶……九〇
廿四　糞ひつて悟る……九四
廿五　阿呆になる修業……九八
廿六　王冠と荷衣……一〇一
廿七　大石良雄の禪機……一〇四
廿八　慈視閣の風光……一〇九
廿九　大根蕪の生命……一一一
三十　盲滅法のカーッ……一一八
卅一　尊貴の參禪……一二二
卅二　生也死也馬鹿馬鹿……一二五
卅三　一筆申す火の用心……一二七
卅四　何をくよ〳〵川端柳……一三一

卅五　雷雪潭と寶洲……一三三
卅六　南天棒と一指頭……一三八
卅七　天狗の隱れ簑……一四一
卅八　白隱禪師の繪畫……一四五
卅九　鯖の頭の鑑定……一四八
四十　娘島田は寢てとける……一五二
四十一　長は長短は短……一五七
四十二　萬疊青山隱古鏡……一六二
四十三　闇齋と景樹の禪……一六六
四十四　禪宗の四十六流……一六九
四十五　禪とは什麼生……一七六
四十六　達磨峰の一句……一七七

四十七　建仁寺十勝……一八〇
四十八　乾坤一擲の仕事……一八二
四十九　入禪の用心……一八五
五十　僧寶と僧業……一八七
五十一　同凡而非凡……一九一
五十二　惡魔の翫弄物……一九三
五十三　悟道を手品にする僞物……一九六
五十四　三橋飛驒守の禪機……一九九
五十五　快僧南天棒……二〇一
五十六　漫性坐禪……二〇三
五十七　佛魔一枚……二〇七
五十八　提唱斷片……二一〇

五十九　懷舊談……二二一
六十　家訓……二三七

參禪餘錄

一　坐禪の俳味……二四九
二　草庵の禪趣……二五三
三　花畠……二五六
四　齊の日……二六一
五　なかぬ人形……二六五
六　出產……二六九
七　建仁寺の臘八……二七四
八　德源寺の臘八……三七九

九　俳句說法……二八四
十　俳偈……二八八

目次終

竹田默雷老師述
禪の面目
定價一圓郵税八錢

語も亦雷の如く默も亦雷の如し本來の面目眞に此の如きのみ今絶版せる『默雷禪話』二卷數百則中より奇峭の論と懇到の說とを選びて百五十則を獲たりこれを世に行ふ所以のもの主とし生死街頭に迷惑するものをして自性徹見の境地に到達せしめむと欲してなり

一、鐵舟と得庵

床に紅一點の花椿、爐に沸々たる鐵瓶、默雷老師の舌頭、古聖去り今人來る。若夫れ過つて之を聽けば、眞にこれ塗毒皷鴆鳥尾。

貴公に話した事があるかも知らんが、彼の山岡鐵舟居士ナ、彼は近世の居士ではなかく出來た人ぢやが、確か勝安房や其他二三人連立つて、或夏の日、何處かの野道を通つた事がある。すると俄かに一天潑墨の如く掻曇つて、大夕立が砂塵を捲いて降出したので、さあ夕立だ――と、皆々雨傘の用意がないから、狼狽てゝ羽織を頭へ冠るやら、袴の股立取つて走り出すやらの大騒ぎをする。其中に紫電一閃、ガラ〳〵と雷鳴がする。驚破と云ふ間もあらばこそ、大きな奴がバリ〳〵と附近の樹へ落ちた凄まじさに、勝や其他は思はず桑原〳〵と頭を抱へ臍を押へて、地

上にヘタ張つて仕舞うたが、鐵舟だけは其處へ突立つたまゝ、泰然自若として居る。雨霽れ雷歇んでから、皆が鐵舟に對つて「君は偉い膽力だな」と感心すると、鐵舟は莞爾と笑つて、

「いや乃公にはヘタ張る暇も無かつたから」と云つたげな。

鳥尾得庵居士が在世の折は、時々こゝの僧堂へも遊びに見えたが、彼の得庵が何處かの激戰の際、一方の隊長として彈丸雨注の下を突擊した事があつたさうぢや。其戰闌なる時、血刀を引提げた一兵卒がッカ〳〵と得庵の側へ來て、

「隊長私の首は未だありますか」

と尋ねたさうぢやが、此兵卒の一言は、實に三昧に入つて居て、大いに禪味があるよ。百姓が我を忘れ、鍬を忘れ、商人が商戰に算盤を忘れ、貴公が細君を忘れる時は什麼ぢやらうナ、アハヽヽ。

海を見た事もない京都人などには解るまいが、海邊に住んで居る漁師などの話に、彼の磯回へ寄せては返す波につれて、ポカリと浮いて來る貝ナ。あれが寄せて來る時は必ず同時にパッと口を開いて寄せて來る、引く時も必ず同時に口を閉づるさうぢやが、同時に口を開き、同時に口を閉づるとは、なんと不思議ではないか。

得庵が何時も此堂の居士大姉達を集めて、彼の如意嶽の大文字は僧空海が書いたのだと云ふが、什麼して書いたのぢやらう、さあ言へ〳〵と問うて居たが、山を紙となし、火を墨とする位、何でもなさうなものぢや。鳩居堂の筆でも書けさうなものぢやナ。

建仁寺の門前に桶庄と云ふ桶屋があつたが、これは至つて正直な奴でナ、毎日毎朝此室へ來て茶を飲んで行つたが、今は故人だ。衲に、

「私が死んだら何になる」

と訊くから、

「そりや牛になるぞ」

と揶揄うて遣つたら、眞に受けて、

「エーッ」と喫驚しよつた。毎日毎日此室へ來るので、偶に客のある時などは、一應寮で一寸控へて居て呉れと賴むと、

「なに清水の觀音樣を見い、誰が參つても默つて御座る。老師にどんな賓客があつても、老師が活佛樣なら、此桶庄でも乞丐でも同席を許して下さるに違ひない」

と、何と云うても構はず、さつさと此室へ這入つて來た。面白い畸人ぢやつた。

二、達磨西來の年代

中外日報所掲某學者の「達磨西來の年代に付て」に對し、老師の意見を叩く。老師喫茶一碗呵々大笑して曰く、

なに衲が實の這入つた法螺を吹かぬとて、中外紙上で東京の某學者が怒て居るのか、アハヽヽ。法螺に實があればそれこそ大變だ、實がないので東京三界までも鳴響いたのぢやないか。實があれば已にこれ法螺ではない、法螺は實が無いので鳴るのぢや。

衲が達磨西來の年代を碌々研究もせずに漫然他の學者の所說を杜撰呼はりしたのが惡いと云ふのか。そりや實際其樣餘計な事を研究した覺えもなければ、某學者の云ふ通り、全然知らずして法螺を吹いたのに違ひない。それが所謂實がない法螺たる所以ぢやないか、アハヽヽ。

併し知らずに識らずに吹いた法螺なら、寧ろ罪がなくて好からう。衲も先年チャン〳〵帽を冠つて歩いて、小兒に石を投付られた事があるが、

無知無心の小兒に對つて怒つても駄目だ。世に無知無心ほど强いものはないナ。

苟も禪僧として、其祖師たる達磨西來の年代も知らぬでは濟まぬと云ふのか、アハアハ。達磨の事なら識らぬ方がいゝ。一體衲は知ると云ふ事よりも知らぬと云ふ事が好きぢや。知るは人間ぢや、知らぬが佛ぢや。其の本尊の達磨さへ梁武帝に對して、朕が面前に在るは阿誰ぞと問はれた時、不識と一喝して居る。此不識の一句に、深遠測るべからざる意味が籠つて居るが什麼ぢや。

余曰く、併し彼の某學者の所說なる梁武帝の時代には、達磨支那へ渡來せず、それより百年以前、即ち劉宋時代に渡來せり云々を以て眞ならしめば、此不識の問答も亦自然抹殺せらるゝに非ずやと、老師莞爾として曰く、

それで學者には困るのぢや。いつも死んだ書物計りを證據に取るからな。此活きた眼玉で以て達磨を見ねば駄目ぢや。某學者の如きは、死達磨のみを見て、未だ活達磨に出會はぬから不可ぬ。何も達磨は唯一箇ぢやない、古今無數の達磨が居るよ。それで古德も、一箇兩箇千萬箇と云はれたのぢや。一寸例を擧げても、梁武帝と問答した達磨もあれば、北魏の嵩山で九年面壁した達磨もある。又葱嶺で隻履を携へて歸竺した達磨もあれば、我朝大和の片岡で、聖德太子と邂逅うた達磨もある。されば又劉宋の時代に支那へ渡來した達磨もあるであらう。已に碧巖にも、達磨亦是觀音と、圜悟禪師の云はれた位ぢや。百億分身で、今頃洋行最中の達磨もあれば、それ此處に大法螺を吹いて居る達磨さんもある、アハヽヽ。

いや眞面目に云つても、由來佛敎に歷史は無いよ。印度もあの通り歷史の無い國だし、支那と雖も、會昌の沙汰等三回も沙汰があつて、佛敎の

古典は悉く灰燼に歸した。それに數千年以後の今日の學者が、多少の舊記古書に據つて、如何して佛教歷史の大生命を把捉せられやうぞ。此活眼を開らかねば、一生心身を勞苦しても、唯達磨のミイラも掘出せぬのぢや。

又達磨多羅の書いた、達磨禪經を、小乘と云うたには違ひないが、そりや同經を小乘と云はうが、大乘と云はうが、衲の見識如何に依るのぢや。衲は唯此達磨禪經ばかりでなく、時に臨み機に應じては、一切藏經五千卷でも七千卷でも、皆小乘と看做す事がある。併し又時と場合には、近松の淨璃瑠本でも、一九の膝栗毛でも、悉く大乘の經文と看做す事がある。此殺活與奪の權を失うて什麼する。

達磨禪經の表題か序文位より讀んだ事がなからうと、衲を罵つて居るのか、アハヽヽ。如何にも其通りだ。衲は平生どの書物でも、經文でも、祖錄でも、表題丈けより外見た事はない。序文見るのも既に遲臭いと思うて居る。全部讀んだ後に非ざれば其書物の內容が解らぬやうで什麼するか。開卷劈頭直ちに全部の大意を看取し得ぬやうでは、天地の活書を讀む事は出來ないのぢや。

併し經文や祖錄などは、表題より外見ぬ代りに、衲は平生如是經と云ふものを讀誦して居るよ。此經文は只一卷や二卷の小部のものでは無い、無量百千萬億卷もある、浩瀚な活經活書である。衲はせめて此書物の表題丈けでも、其の某學者を初め、世の學者先生達に知らせたいと思うて居る。序文丈けでも敎へたいと思うて居る。此活經活書を讀破して、而して後始めて、どんな達磨とでも自由に會談が出來るのぢや。咄々只許老胡知、不許老胡會ぢや。

全體衲は三世の諸佛も容捨なく罵詈し、歷代の祖師をも遠慮なく誹

謗するが、是迄一度も怒つて來た佛もなければ、小言を云うて來た祖師もない。それに某學者が怒つて居るとは、其學者は未だ精神の修養が足らないと見えるナ、アハヽヽ。

三、瓢中の坐禪

禪學は、丁度瓢簞の中へ這入るやうなものぢや。最初は口が小さいので却々這入り難いが、漸と這入ると、少し天地が廣うなつた心地がする。中程で又狹くなる。其の狹い中程の一關を透脫すると、初めて兩岸の桃花を觀賞しつゝ、輕舟峽を出でゝ大湖に漕ぎ出づると云ふ概があるのぢや。併し又いつまでも瓢裡の風景を樂んで居ては尻が腐る、すぐ此瓢簞も打碎かねばならぬテ。

先年鳥尾得庵居士が、壽塔を建てた時、禿はお愛想の積りで、

「彼の壽塔は何處やらに在つたのぢやナ」

と、云つたら得庵は、

「なに最う忘れたのか」

と、云ふ。そこで禿は、

「三たび天子に生れたので忘れた」

と、雲門の故事を以て答へたら、得庵も微笑して居た。人間も籍を官員錄に列すると、神通力を失ふからナ。丁度頃日の新聞にあつた通り、後藤男爵が、田中舍身居士を見忘れた話と一般ぢや。

先年帝國議會を傍聽した禪僧で、河野磐洲等に東京へ引張り出されて居る、伊豫の禾山和尚ナ、あれは却々の學者ぢや。王政維新の際、舊物破壞の風潮と共に毀釋論の盛んに起つた時、京都に各宗管長會議のやうなものを開いて、其前後策を講じた事がある。其の時禾山は、美濃井深の

一雲水であつたのに、乃公出でずんば天下の坊主に何事が出來るかと、七寸の破草鞋を踏締めて、遙々京都へ遣つて來て、遂に妙心寺に駐錫したが、乞丐のやうな一雲水の身で、眼中紫衣の高僧を空うする處、所謂貧は范丹の如く、氣は項王の如しぢや。ちと今日の青年にも、こんな氣概が欲しいものぢやテ。

四、白紙の艶書

玄沙の師備禪師と云ふのは、或僧よりの手紙の返翰に、只白紙三枚を封じ込んで送られたさうぢやが、面白いナ。白紙の手翰が讀めぬやうでは、宇宙の活書を讀む事は出來ぬ。そりや吉野太夫の、忘れねばこそ思ひ出さず候も、一寸禪味はあるが、これでも已に言葉が多う過ぎる。今の鎌倉の宗演和尚が十七、衲が二十二、人とも未だ小僧時代の折、衲は之を眞似して白紙の手翰を宗演に遣つた事がある。其白紙の手翰が讀めなんだ宗演も、今は却々偉い者になつて居る。祇園美人にも、ちつと禪機を振うて、此白紙の艶書を嫖客に送るやうな妓がありさうなものぢやナ、アハヽヽ。

伊藤春畝公は、女に目も鼻もないと云ふ話ぢやが、禪僧にも公以上の好色漢があつたよ。それは美濃虎溪の潭海和尚といふてナ、最初武州永田の僧堂を董して居た人だ。勿論維新草創の際の事で僧堂の金を横濱あたりの遊廓に貸付けて居たが、一向催促しても償却して呉れぬので、遂々和尚が直談判の上、金が返せにや美人を一人寄越せとて、其の茶屋から、藝妓を一人僧堂へ引張つて歸つた。それから後は片時も藝妓を傍離さず、厠圊へ行く時までも伴れて行つて、おい、へこの先が歪んで小便が散る、眞直に持つて居て呉れ、抔と、大衆の面前でも、誰憚らず吩附ける。

其の藝妓こそいゝお役ぢやが、後年虎溪に坐つてからも、絶えず年増の一美人を侍らして居たが、或日酒を飲む時折ふし其の美人が外出して酌をする者がないので、そんならと、信女の位牌と差向ひで酒を飲んで居たさうぢやが、流石の春畝公も、此潭海和尚には叶ふまいよ、アハヽヽ。

今は故郷土佐へ歸つて居るが、元裁判官で德弘時翼と云ふ畸人があつた。仙人になる志願で、有ゆる仙書を蒐集したり、白川の奥山に入つたりした男ぢやが、いつも赤跣で歩いて居る。

「なぜ赤跣で歩くか」

と、聞くと、

「赤跣で歩いて居ると、仕舞に足が靴のやうに固くなる、猫や犬の足が證據ぢや」

と云ふ。其後此室へ來て、

最う仙人を廢めました」

と、云ふから、

「何故廢めたか」

と、聞くと、

「私が仙人になつても、妻や子が仙人になりません」

と云ふ。才氣煥發の男で、却々の畸人ぢやつたが、或日石地藏一體を自宅の庭へ安置して居るので、

「何をするか」

と尋ねると、

「天下一人の語るべき者がない、それで石地藏を朋友にして居るのぢや」

と云うて居た。

五、活ける東京人死せる京都人

老師所藏隱山和尚の書幅に、

活盡死人、死盡活人

との偈句あり。老師之を床間に掛け且曰く、此最初の句は死せる京都人の靈藥、次の句は、活ける東京人の毒藥ぢや。いま之を大にすると、一は東洋人の靈藥、二は西洋人の毒藥ともなる。兎に角京都人は餘り死に過て居る、東京人は餘り活き過て居る、卽今何方にも此砒が必要ぢや。

獅子は獅子、狐は狐ぢや。狐が什麼に獅子の皮を冠つて其の獅子吼を學ばんとしても、コンコンコンとより外聲が出ない如く、世の所謂學者輩が徒らに文字の上から禪を學ばんとするのは、丁度狐が獅子たらんとする類ぢや。

夜をこめて鷄の空音ははかるとも世に逢阪の關はゆるさじ

此清少納言の戀の關所の如く、臨濟の關門も亦容易く透脫する事を許さずぢや。相似の禪を許さずぢや。

參禪の學者に三つの差別があるよ。之を象馬兎の水を渡るに譬へる。水深に徹底せずんば止まざるのは象、水中を游泳するのは馬、淺く水上をチャプ〳〵と行くのは兎ぢや。いや兎でもいゝ、水を渡るのは、卽ち水を渡るのぢやからナ。

妙心寺の開基關山國師は、東海道を廿一回も往復せられた人ぢやが、或者が、

「あの時に白雪の降る不二山を御覽になつたか」

と問うた時、國師は不思議さうな顏をして、

「なに東海道に其樣な名山があつたのか、一向衲の眼に這入らなんだ

が」

と答へられたさうぢや。學者もこゝまで三昧の妙處に入らねば駄目ぢやテ。

不二山と云へば白隱禪師の和歌にこんなのがある。

日本にすぎたるものが二つあり駿河の不二に原の白隱

禪師は我が已墜の禪風を扶起した人で、之を駄法螺とばかり聞いては眉鬚が墮落するよ。

關山國師が、未だ美濃井深の山中に坐禪して居られた時、土地の百姓等は、唯名も無い一雲水とのみ思うて居た。すると妙心寺建立に付、大燈國師の推奬で、勅命を以て召され、白馬朱傘の使者が、遙々此井深の山中まで來たので、皆々初めてそんな偉い坊さんであつたかと呆れた。中にも、平生國師に瓜や茄子を贈つて居た或老夫婦は隨喜の涙を流して、其出立せられる前夜、國師を訪ねて慇懃に說法を乞うた。すると國師は物をも言はず、老夫婦の頭と頭を鉢合せにゴッツリと打合すと、イターイと云ふ。すると國師は、

「それその痛いのが此上もない有り難いことぞ」

と云はれたが、此老夫婦はこのゴッツリで悟つたさうぢや。

それは當時已に花園の玉鳳殿はあつたが、妙心寺としては、未だ一宇の茅舍に過ぎなかつた。それでいつも降雨の際、ポト〳〵と雨漏がする。これも或雨の日のことぢや。關山國師は大聲を揚げて、

「さあ受ける物を〳〵」

と二人の雛僧を呼ばれた。すると聲に應じて一人の雛僧は盥、一人の雛僧は笊を持つて來た。國師は盥よりも却て笊を持つて來た雛僧を褒めて、

「笊ぢや〳〵可い物を持つて來たナ」

前にも一寸話をした、玄沙の師備禪師は、廣東の漁師の兒である。或日親父に伴はれて魚籃の番をして居たが親父が獲る魚を禪師がすぐ逃して仕舞ふ。親父の漁師は一生懸命に網を打つて、最う大分獲れた頃と魚籃の中を覗くと、獲つた筈の魚が一尾も居ないので、さあ什麼したと怒鳴ると、

「禪師は殺生しては可愛想ぢやから皆逃して遣つた」

と答へられた。それで親父も此兒は迚も漁師の跡繼にはなれないと出家さした、此禪師が出家後廣東より閩嶺を超えて行脚の途中、山路の石に躓いて生爪を剝した刹那、アッ痛い〳〵と豁然大悟して、直に行脚を止めて跡戻りをした。

唐の玄宗皇帝が、安祿山の亂に會して蒙塵せられた時、其鸞輿の金鈴が、三郎郎當々々々〳〵と鳴響いたさうぢや、三郎とは玄宗の諱郎當とは零落したと云ふ意味ぢや。三郎郎當々々々〳〵と鳴響いた處に禪味があるよ。

孤峯頂上に立て或時は雲霄を望み、或時は十字街頭に和泥合水すと云ふ事がある。此の境涯が大事ぢやが解るかナ。それ今落草して、馬糞牛糞に對して居るのぢや、アハヽヽ。

先日東京月桂寺の華嶽和尙が此室へ來ての茶話に、あの有名な釋元恭は此華嶽和尙の法弟ぢやさうで、支那地方で神變不思議の偉人と崇められて居るのは、此眞物の釋元恭の名を騙つて居る福岡縣人日種令正と云ふ別人の細工ぢや。これは、縱横機才のある男で、これが又幾人も釋元恭の影武者を使うて居て、あんな天狗の眞似をして居るとの事ぢや。京都人は知るまいが、其化物の釋元恭の根城は此京阪地方の何處か

に在るとの事ぢや。

六、太鼓の音を描く

筑前博多の聖福寺に、仙崖和尚と云ふのがあつた。これは現住の東瀛和尚から四代以前の名僧で或時心易い某書家に、

「一寸此唐紙へ太鼓の音を描いて呉れんか」

と乞はれたぞると書家は、

「太鼓の音とは難題で迚も繪になりません」

と大いに窮した。和尚は、

「太鼓の音位が描けんで書家と稱へられるか、衲のやうなほんの素人繪を稽古する者でも、太鼓の音位は何でもない。それ見よ」

とて、卽座に唐紙へ槍一本を描いて、

「什麼ぢや、これが太鼓の音ぢや、天突く〳〵ぢや。アハアハ」

と哄笑一番せられたので、書家も思はず、其機才に心膽を寒からしめたとは面白いナ。

現住の東瀛和尚も亦却々得難い器で、衲の建仁寺に住る時も、此和尚に伴はれて來たのぢやが、當時衲は管長などゝ云ふ大責任のある位置に坐りたくは無かつたので、途々東瀛和尚に向うて、

「和尚こそ建仁寺とは淺からぬ因緣もあれば、先づ管長にならるゝが順當ぢや」

と云つたら、和尚は喫驚したやうな顏をして、イヽエと頭を掉り乍ら、

「衲は東福寺の管長ならばお受けをする、他は眞平御免ぢや」

と至極眞面目に辭退せられたのが可笑しかつた。なぜかと云ふと、それは東福寺の開山聖一國師は眇で、此東瀛和尚も眇ぢやからナ。自らも聖

一國師を以て任じ、他も斯う綽名を付けて居たのぢや。

八識とは眼、耳、鼻、舌、身、意識、摩那識、含藏識の八識を云ふので、摩那識は又辭送識とも稱して、六識を含藏識へ轉送する役目を持つて居る。坐禪は卽ち此八識を打破する方法に外ならぬので、寂光淨土とは、此八識打破の心地の事、八識打破の三昧に入れば、それ此通り滿身光明赫灼として、手も足も毫光ならざるは莫しぢや。併し此毫光は明い毫光ぢやない、玄い毫光ぢや、

打落帝釋冠、却是寒山箒。善い事も惡い事も一掃するのが此寒山箒ぢやが、一切の塵埃穢垢を廓淸して後は、乃ち此寒山箒も無用である。此時帝釋冠無し、寒山箒無し、而して後帝釋冠有り、寒山箒有りぢや。所謂四種の與奪、臨濟の四料揀も之に外ならぬのである。

七、花見客に放屁

衲は昨日美術展覽會を觀覽しての歸途、圓山の絲垂櫻を一見したが、其花見客の仰山なこと、何故こんな櫻花の爲に滿都の士女が斯くも狂奔するのか、實に馬鹿な奴ぢやと思うた。櫻花は未だしも錢儲けをするから怜悧いが、之に浮るゝ人間は馬鹿の骨頂ぢや。高臺寺の政所にも立派な絲垂櫻もあれば、深山の奥にも櫻花が咲いて居る。それに唯だ一本の此圓山の絲垂櫻に狂奔するのは、いづれ祇園の解語花に戯れたいからであらう。それで衲は昨日圓山から祇園へかけての花見客を小口から睥睨して歩いた。而して彼の一カの門でプッと大きな屁を放つた時の心地よさ、百萬の花見客が此屁の爲に吹き飛ばされる程の氣持ぢやつた。今晩でも行つて見よ、絲垂櫻の花に衲の屁の匂ひがあるぞ。

屁なり迚仇に思ふな諸人よぶつといふのは佛なりけり

と云ふ古德の和歌もある。百日の說法屁一つと云ふのは、釋迦が最後に空理を說かれた、即ち說不說の妙處を指すのぢや。衲の花見客を吹き飛ばした放屁も、亦釋迦傳來の放屁で、旅順陷落の時の高臺寺の祝砲以上の大音響があるよ、アハヽヽ。

衲が妙心寺に居て未だ十七八才の雛僧の時ぢや。越溪和尙のお伴をして東山から祇園町を通つた事がある。其時和尙が衲を振顧つて一寸除けよ〳〵と云れるから何事かと思ふと、ブーッと大きな屁を放つて、あゝ面白い、京美人が皆鼻を撮んで居るだらうと哄笑せられた事がある。其時分は未だ禪坊主などは生れてから鏡を見た事もない程で、丁度四條の紅平の店に大きな姿見鏡があつたのを、和尙も衲も立止つて眺め、衲の顏はあんな顏かと思つた事もあつた。此越溪和尙は、却々面白い和尙で、衲の昨日の放屁も畢竟師匠の衣鉢を傳へたのぢや。

正念と邪念の葛藤を天帝釋と阿修羅の戰鬪に譬へてある。正念卽ち天帝釋が勝利を占むる刹那は、阿修羅の魔軍が藕絲孔中に遁入する。さあ藕絲孔中とは何處ぢや、皆人間の心の中に在るのぢや。あゝすつぱりと魔軍を奉天府へ掃蕩して仕舞うたと安心したる時は、早や藕絲孔中から露助と云ふ魔軍が、金米糖のやうに角を出して居る。戰國時代でも平和時代でも、兎に角油斷は大敵ぢや。いや學者が坐禪をする上にも此用心が肝要ぢや。

八、茶味と禪味

茶と云へば茶は却々禪味に適うて居る。床に公案の書いた軸を掛け、瓶に新しい花を活けて、斯うグーッと一息に飲み干した趣きは所謂、

一口吸盡西江水、洛陽牡丹新吐蘂

ぢや。それから何でもないやうぢやが、此茶碗を次から次へ經行さす上には言ふべからざる禪味があるよ。又軸は繪などよりも公案を記した書に限るし、花は辛夷でも佗助でも只一輪で好いナ。これ一華開いて天下の春を知るぢや。

畫幅の表裝も紙で結構ぢや。眞中の書が眼目ぢやから、別に邊幅を飾る必要がない。表裝に絢爛を極むるのは利慾を目的とする骨董家の事で風流清淡な茶家の事ではないよ。衲は先年水本と云ふ裁判官に「茶味禪味、味味一味」との語を書いて贈つたが、其人は其人格の點に於ても少しも邊幅を飾らぬ人物で、當世の所謂紳士のやうに、眞中の眼目(其人格)は什麼でも好い。唯だ絹布や金時計で、身體の表裝を立派にさへすれば好いと云ふやうな價物ぢやなかつた。兎に角風俗の奢侈は相戒むべしぢやナ。

茶の法式は秩序整然一絲亂れざるものぢやが、其極致に入ると、無法の法、即ち亂れと云ふ妙處に至るが如く、坐禪も亦出來上つた曉には、千七百の古則公案も、凡て大捨して忘れて仕舞う。こゝに於て始めて縱横自在の働が出來る、乃ち菩薩の境界に入るのぢや。

今日は鳥尾得庵居士の三年忌に相當するので、左邊室の床には維摩の像を掛けて置いたが、維摩は居士の親方、得庵も亦居士の親方を以て自任して居た人ぢやから、丁度追悼の意になつて面白からう。此維摩は不二の法門を說いた居士で、文殊が什麼かこれ不二の法門と問うた時、維摩は默々として無言を守つて居た。こゝが維摩の一默と云つて、宗門に八釜しい處ぢや、此維摩の一默は、唯徒らに默つて居るのぢやないぞ。茶室には衲の描いた鼈鼻蛇と、得庵居士の書簡が軸にして掛けてあ

るそれは去る巳歳の正月ぢやつた。衲が會下の居士大姉達に向つて、若し此鼈鼻蛇に喰はれたら什麼して此正月を迎へるかとの公案を出した時、それを得庵が聞き傳へて、そりや面白い、私にも是非其鼈鼻蛇を描いて呉れとの事で描いて贈つたものぢや。書簡は之に對する得庵の禮狀であるが、得庵も遂に此鼈鼻蛇に喰はれて仕舞うたのぢや。

此間支那地方を漫遊して歸朝した、藤村曾山と云ふ南畫家がある。これは七八年ばかりも此寺の僧堂で坐禪して居た畫家ぢやが、數日前東京博覽會の出品繪畫を一覽して來ての批評に曰く、どの出品繪畫を見ても、悉くこれよう描かう〳〵と云ふ風が仄見えて駄目ぢや。竹内栖鳳のヴエニスの月、山元春擧のロッキー山の雪は知らぬ外國の風景ぢやから批評は止めとして、都路華香の吉野の花は花ばかりで山がない。あれでは吉野山になつて居ないなどゝ批評して居たが、華香に云はしたら、亦其花ばかりの處に一見識があるのかも知れんナ。

九、細君を忘れる

これは誰でも知つて居る話ぢやが、昔魯の哀公が孔子に對はせられて、

「睽の臣下に、宿替をする時細君を置忘れた者がある、天下これ以上の健忘はあるまい」

と仰せられて興笑せられたぞると流石は孔子ぢや、透さず遣つた、

「いや細君を忘るゝ如きは未だ以て珍聞とするに足りませぬ、彼の殷の紂王は、自分の心をも忘れしに候はずや」

と暗に哀公をも諷諫したとの事ぢやが、今日と雖も猶且家庭の細君を忘れて、花柳の美人に心醉する者あれば、國家を忘れて黄金の私利に齷

齪たる者もある。滔々として皆其心を忘れて居る者ばかりぢや。乃で我が臨濟の坐禪は、其の心を忘れさゝぬやう、正念相續の公案を與へて、兎の毛の油斷も隙も許さぬのぢや。

例へば古の武士は大小を二本差して、大は時に身邊を離す事あるも、其小は護身用として滅多に腰間を離さぬ。坐禪の學者も亦此通り、常に八方に敵を受けつゝありとの心地で、不斷に公案と云ふ寸鐵を肌身離さず持つて居る。即ちこれ正念の相續に外ならぬのぢや。

心に油斷がないと頓智が得られる、頓智は一種の禪機ぢや。昔二人の雛僧があつて、一人は此靈洞院のやうな寺の雛僧で、一人は向うの靈源院のやうな寺の雛僧ぢや。或日の朝、靈洞の雛僧が竹箒を持て門前を掃除して居ると、靈源の雛僧が豆腐買ひに通懸つたので靈洞の雛僧が、

「何處へ行く」

と問うた。靈源の雛僧は、

「足に任せて」

と意外の答へをしたので、一方はぐつと二の句に詰つた揚句、今度は師匠の和尚の智惠を借つて、

「足に任せて」

と答へよつたら、

「足無き時什麼生」

と問うて遣らうと待構へて居た。すると其翌朝、

「何處へ行く」

と問うても、

「足に任せて」

と答へず、

「風に任せて」

と言捨てゝさつさと行く。此次こそ、

「風無き時什麼生」

と遣つてやらうと思つて居ると、今度も亦思ふ壺に陷らず、

「何處へ行く」

「豆腐買ひに」

と前日と異つた返辭をして行つて仕舞うたが、これ一方の雛僧には機先を制する頓智があつて却々油斷して居ない。殊に最後の「豆腐買ひに」には深遠な禪味が籠つて、向上越格の人と雖も容易に言へぬ一句ぢや。凡そ天下の事も此問答と同じく豫め計畫した事に碌な結果は得られない。難局に出會ふ毎に虛心坦懷、臨機應變に遣る仕事の方が、却つて天眞爛熳で、良結果を得られるやうに思はれるナ。

衲が先年江州へ巡錫した時、見て一番驚いたのは、太鼓の大きい事ぢやつた。江州到る處の村々には、必ず一つづゝ太鼓堂と云ふものがあつて、其太鼓の大きい程村の自慢で、太鼓の大きさに從つて村の人の心も大きいと云ふ勘定ぢや。嘘云ふなら此左邊室一ばい酒屋の桶よりも大きいのがある。而して此太鼓の皮は大津の車牛の皮を剝いで張るとの事ぢやが、何故衲が太鼓を見てそんなに驚いたのかと云ふに、昔から禪坊主が修業に骨折らず、布施ばかりに飽いて居ると、今度死んだら大津の車牛に生れ變ると云ふ諺があるので、あゝ衲の背中の皮をあんなに太鼓に張付けられるのかと、それで慄然として驚いたのぢや。雛僧の時に聽いて骨髓に徹して居た事を想出した故ぢや、アハヽヽ。今は大津の車牛などは何處へ行つたやら、あんな大きな牛は一向見當らぬやうぢやが。

十、明末の禪風

黄檗の開山隱元禪師は、多少宗旨も出來た人ぢやらうが、寧ろ念佛の人ぢや。それは明末の禪風と云つて、雲栖袾宏和尚と云ふ當代の名僧が、末世の坊主には到底坐禪などは出來ぬ、其機根に隨つて念佛唱名をさすに如くは莫しとて、念佛を公案の中に加へられた。之を明末の禪風と云つて、隱元は此雲栖和尚の流派である。殊に隱元渡來の時代は、日本の禪風も亦た明末の餘弊を受けて命懸け絲の如き危さで、關東地方の禪寺には悉く念佛堂が出來て居ると云ふ有樣ぢやつた。乃で白隱禪師が現はれて其霹靂舌頭の觸るゝ處、念佛などは我が禪宗の英氣を挫くものぢや、此雲栖和尚の如きは、少しく文字を解する底の瞎禿奴に過ぎずと毒罵して居る。白隱禪師は凡て此鋭鋒當るべからざる口調で、當時已

墜の禪風を振起した人ぢや。

併し雲栖和尚の著はした「禪關策進」と云ふ本は、是非坐禪の學者は一讀する必要がある。これは白隱も推奬して居る本ぢや。唯其中の念佛を勸める公案のみは、白隱も之を削つて仕舞はねばならぬと云うて居る。何故念佛が惡いと云ふのか、それは我が臨濟でも佛を拜まぬ事はない、併し能信と所信は不二、佛を拜むは即ち自己を拜むのぢや。釋迦何者、達磨何者ぢや。他力念佛を賴むやうな弱音は吐かぬ。それで衲も世人を惑らす虞があるので、此建仁寺の伽藍堂を閉鎖して、誰にも參詣さゝぬやうにしてあるよ。

春彼岸誰も參らぬ建仁寺

ぢや、アハヽヽ。

昔一匹の古狸が、此頃のやうな朧月夜のことぢや。村の三郎兵衛と云

ふ百姓の裏戸へ出て來て、

「三郎兵衛あんぽんたん〳〵」

と揶揄ひよるのを三郎兵衛が聞き付けて、はゝあ狸の惡戯ぢやナ。なに狸位に負けるものかと、

「左樣いふものがあんぽんたん〳〵！〳〵」

と徹夜あんぽんたんの根競べをしよつた。すると狸の方が磕と沈默して仕舞うたので、こりや不思議と、翌朝裏戸を開けて見ると、狸が死んで居る。つまり根負けをして死んだのぢやが、これ人間成功の道も亦唯精根が第一義と云ふ例話ぢや。

仙崖和尚がこんな○(圓相)を描いて其下へ「十三七つ」と賛せられた軸がある。これは「彼のお月さんいくつ十三七つ」と云ふ子守唄の意味ぢやが、此お月さんは、何を指してあるのか解るかナ。十三七つは普通の年齡をかぞへる數字ぢやないぞ。無數の數、數學の原理根本が喝破してあるのぢや。

十一、極樂へ嫁入

至誠鬼神を動かす。人情の自然に流露したほど尊いものはない。或一人娘を死なした老婆があつたが、其京人形のやうな亡骸に犇々と抱き付いて、わつ〳〵と慟哭して居た所へ、淨土か眞宗か檀那寺の和尚さんが遣つて來て、慰め顏に、

極樂へ嫁にやつたと思や濟む

と諭した。すると老婆は、

思や濟めども〳〵

と愈よ泣きくづをれたと云ふが什麼ぢや。此「思や濟めども〳〵」には祖

師も窺へざる妙處がある。

白隱禪師の會下には女子に怜悧俊發な者が多かつた。中にもおさつ婆は其隨一で、娘時分から天然に禪機を得て居た女ぢやつた。其家は日蓮宗でいつも佛壇に法華經の經箱が飾つてあつたのを、或日おさつがそれに尻掛けた所が、兩親は、

「あゝ勿體ない罰が當る」

と叱付けた時に、おさつは、

「フヽーン、これが法華經か、お經もお尻も同じことぢや」

と平氣で居るので、有難屋の兩親は、さあ娘が發狂したと心配した揚句、白隱禪師に相見し其由を話すと、禪師は、

「そりや面白い、そんなら此和歌を與へるから、床の間へ掛けて娘を試して見るがいゝ」

とて作られたのが即ち、

暗の夜に啼かぬ鴉の聲聞けば生れぬさきの父ぞ戀しき

と云ふ和歌ぢや。すると果しておさつは、

「これは阿誰の和歌か」

と問うた。兩親は、

「原の白隱禪師の和歌ぢや」と答へると

「フヽーン、妾の腹と一緒やナ」

と云うたのが因緣で、遂に白隱の會下となつたのぢや。此のおさつは支那の無鹽其方除けの醜婦。色黑のでぼ、ちんぢやつたが、心は西施も及ばぬ美人ぢやつた。其愛孫を失うた時、聲を揚げて啼泣したのを悔みに來た人達が、

「おさつ婆さんは坐禪して居ながら、彼樣に愁歎するのは腑に落ちぬ」

と誹つた所が、おさつは之を聞いて、

「妾は坐禪をして居るので尙悲しい、併し妾の涙はお前達の涙と涙が違う、滴々玉を成して居る。亡き孫には此涙が千僧萬僧の供養よりも功德になるのぢや」

と云つた話があるが面白いナ。

師家が講座の上で歷代の祖師を罵倒するのは、決して罵倒にならない。臨濟の打爺拳と云うて、自分の兩親でも打撲るほどの獅子兒が出來ねば駄目ぢやが、之と共に此打爺拳を持つて居る臨濟和尙は、有名な孝子であつた事を知らねばならぬぞ。

こゝに酒道樂の放蕩息子があつて、父親は年百年中之を心配して居た。或日のこと例の如く酒氣芬々として深更に歸宅して、暗がりで寢て居る父親の禿頭に躓いた時、

「あゝ勿體ない」

とお辭儀をしたのを父親が聞いて、伜も餘程改心して呉れて嬉しいと、翌朝床を離るゝとすぐ伜に對つて、

「お前は昨夜お說敎でも聽きに行つたのか」

「なに、そんなものを聽きに行くもんか」

と邪慳に云ふ、

「それでも私の頭に躓いてあゝ勿體ないと謝罪つたが、餘程改心して呉れて嬉しい」

と涙と水洟を流して喜ぶと、伜は、

「フヽーン、昨夜のはお前の禿頭ぢやつたか、そんなら最と酷く蹴つて遣るのぢやつた。己は又一升德利に躓いたのかと思つた」

と答へたさうぢやが、こんなのが眞箇の不孝兒で、我が臨濟の打爺拳と

之を同一視しては、眉鬚が墮落する。

十二、一升德利の公案

此一升德利で想ひ出したが、衲が隨身して居た、肥前平戸雄香寺の釣叟和尚と云ふのは却々の酒豪で、其後住の菅嶺和尚も亦之に劣らぬ酒好きぢやつた。或日菅嶺は一升德利に伊丹酒一ぱい貰うた嬉しまぎれ、師匠の釣叟にも見せて喜ばせやうと、大急ぎで廊下を走つた端的、中庭へ踏み外してどつと尻餅を突いた。大抵の者なら德利を割る處ぢやが、菅嶺は自分の怪我は顧みず德利丈は無事に持つて居た。こゝまで酒三昧に入ると、一升德利も公案になるよ。

トロトロトロ、これ何の音ぢや解るかな、アハヽヽ。甘酒をあける音ぢや。トロトロトロ、これ何の音ぢや解るかな、肥汲む音ぢや。音はトロトロトロの外何もないが、甘酒と思へば甘酒の音、肥汲むと思へば肥汲む音に聞える。又獅子吼と聽けば獅子吼にも聽えるのぢやが、トロトロトロこれ坐禪の眞只中ぢやぞ。

臨濟の禪風は、五逆罪を犯して雷電に擊たるゝが如く、雲門の禪風は九重門前に錦旗の翻翻たるに似たりぢや。さあ此禪風を微細に窺知せねば、到底劈頭機を奪ふ底の仕事は出來んぞ。左樣ぢや、坐禪の學者には臨濟錄無門關碧巖集これだけ座右に備へて居ればいゝ、只これだけでいゝ。

黃檗の僧侶は皆鬚髯を生して居るぢやらう。あれは支那僧の眞似ぢや。大體黃檗僧侶には持物が多いよ、鬚髯を生して如意を持つて、中啓を持つて、珠數を持つて、其上に寺を持つて、お負に未だ嬶まで持つて居る坊主があるが、嘸重たい事ぢやらうと、餘所事ながら心配して居るよ、ア

ハヽヽ。

夜更けて飢鼠燈臺に觸ると云ふ句がある。これは學者が坐禪三昧に入つて居る時、チラチラと昨日の事や一昨日の事などが心に浮ぶのを指すのぢや。又、鼠錢筒に入て技已に窮ると云ふ句がある。これは什麼に恰悧な鼠でも、其鋭い牙を施すに所がない。即ち學者が進退維谷る難處に到つた事を云ふので、彼の白隱禪師が口癖の雲助歌、

箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川

と同意義ぢや。苟も坐禪の學者は一度は鼠技窮し越すに越されぬ大井川の難處、即妙處を透過せねばならぬ。此難處を經ねば坐禪も未だ迷ひと云うて好い。阿波の鳴戸を越さぬ鯛は、眞箇の旨味がないのと同じく、參禪の蛸連中に於ては尙更の事ぢや、アハヽヽ。

最一つ鼠の話ぢやが、先年此左邊室の鴨居の上を、ちよこ〳〵と鼠が白晝でも往來しよるので、衲は其通路へ暖廉のやうに白紙を垂らして、「碩鼠〳〵技倆什麼生」と樂書して置いた。すると鼠先生碩鼠々々技倆什麼生とは我々鼠族を馬鹿にした言葉ぢや。なに糞ッと押し通らうとしても、ふうわり頭に白紙が冠さるので、忽ち東西南北の方角を失して踏阻逡巡、遂々鼠の方が根負けをして出て來ぬやうになつたよ。

禪機を古來無字劍とか、吹毛劍とか、劍に譬へてある。箭新羅を過ぐ劍去て久し、とは、遲臭い事を云ふのぢや。此劍はスウ―と知らぬ間に人を切て居る、恰で蜂が牡丹の蜜を吸取つて、而も些しも花を損ぜぬやうなものぢや。それに相手の人間は首無しで物を言うて居るから可笑い。衲は斯うして日々滿都の市民を殺したり、又鳥邊野の死屍を活したり、殺活自在ぢや。

禪宗五派中の法眼宗を立てた、法眼和尙と云ふ歷々がある。晩年田舍

の草庵に安居して、芋堀坊主のやうな顔付をして居た。丁度冬の寒い日、偶ま通り懸つた四五人の雲衲が、どうか焚火をさして呉れよとて草庵に入つて來て、焚火に煖りながら華嚴の三界唯心が如何の、法相の萬法唯識が如何のと、頻りに其博識を衒うて居た。默つて爐邊に之を聽いて居た和尚は、アハヽヽ、博識の雲衲達ばかりぢやが、

「そんなら其庭の石は心の中に在るか心の外に在るか解るかナ」

と、猫を冠つて穏和く一本遣つた。すると一人の雲水が、

「心の内にある」

と云ふと、法眼が云はれるに、

「あゝ御苦勞ぢや、そんな重い物を腹に入れて行脚するとは」

と笑はれた。名もない芋堀坊主と思つて居たのに、えらい事をいへよるなと瞠目したが、遂に法眼和尚なる事を知つて、皆其會下になつたさうぢや。此石は心の中に在るか心の外に在るか、若しあんたなら什麼答へる乎。

十三、坊主頭に丁髷

白隱會下の遂翁和尚は、最初醉翁と稱して酒の好きな人ぢやつた。未だ其雲衲時代に、伊勢淺間山金剛證寺の大會に行つての歸途大勢の雲衲達と一緒に神宮參拜に出懸けたが、當時坊主が神宮へ參拜するには、今の附鬚のやうに坊主頭に丁髷を戴せて行かねばならんので、山田の町々には此丁髷を賣つて居たものぢや。これは昔弘法大師が神宮參拜の時、天照皇大神が態々大師を出迎はれたと云うので、以後僧侶の參拜は、神慮を煩はすこと多しとて、必ず坊主頭に丁髷を戴せねば參拜を許されぬ例になつて居た。處が遂翁和尚は、坊主は坊主で好い。丁髷を戴せ

て俗人の眞似をするのは面白くないと、和尚だけは坊主頭のまゝ大勢に紛れて參拜した。之を神官が見付けて、段々大會のあつた金剛證寺へ懸合うても、何處の雲衲の所業か判らず、何分大勢の中ぢやからと云ふので其儘、濟んだとの話ぢや。

此伊勢から駿河へ歸る海上で、風波の爲に遂翁和尚の乘船が難破して、他の乘合の雲衲も悉く海底の藻屑と消えた。すると七日程經てから漁師の引網に大きな一匹の蛸が罹つた。そら大きな蛸ぢやと網を引揚げて見ると一人の坊主ぢや。未だ全く絶息したやうにも思はれんで、濱邊に汐木を焚いて煖めたり、いろ〳〵介抱に手を盡すと旋て蘇生したのが遂翁和尚で、七日間も海底で坐禪三昧に入つて居たお蔭で助つたのぢやが、道力もこゝに至ると偉いものぢやナ。併しこんな大機な和尚でも、猶且揀擇があつたと見えて、

嫌いなものは象眼獅子鼻毛なし足汁くひ看經彌左衛門

と云うて居る。毛なし足とは、美人の白脛の事ぢやらうナ。この揀擇が恐しいぞ。

此遂翁は、後に原宿の白隱の松蔭寺に住したが、其法嗣に春叢和尚、春叢和尚の會下に、阿波の文奬和尚と云ふ荒法師が出來た。文奬は餘程腹黑い和尚で、師匠の春叢も、御前は迚も師家となる德器ではない、此柱杖子を與へるから、諸國を遍歷して到處の師家を勘破して廻れと云うた。乃で文奬はそりや面白いと、其柱杖子を突いて師家荒しを役目としたので、當時師家は阿波の文奬の名を聞くと皆恐れたものぢや。而して大抵の師家はこれに遣られたが、其中九州の蘇山と云ふ師家は、文奬が來たと聞くや、さあ天下の名僧ぢや〳〵と、錦茵を出すやら、馳走をするやら叮重に待遇をしたので流石の文奬もこれには氣を呑まれて負けた。

其他到處で幾箇も喚鐘を分捕して、それを辨慶のやうに腰に括つて持歩いて居た。それは喚鐘を叩いて獨參を聽くのは、禪門では餘程大事なことで、立派な師家でなければ許されぬとしたものぢやからだ。某寺の提唱最中に文奬が出懸けて、ちやんと師家の技倆を勘破するや否や、つかつかと師家の面前へ出て、くるりと尻を捲り、「さあ衲の尻は四角か八角か見い」と言捨てゝさつさと行去つた事もある。禪門近世の荒法師ぢやつた。

十四、夢窓國師と戀歌

洛東天龍寺の開山夢窓國師は女にせま欲しい美僧で、或時島原の太夫が懸想して、

清くとも一夜は落ちよ瀧の水濁りてあとの澄まぬものかは

と云ふ和歌を贈つた。此太夫も國師を見染むるほどの者ぢやから、いづれ吉野紫以上の名妓ぢやらうが、國師は、

いとゞさへ危くすめる露の身を落ちよとさそふ萩の上風

と返歌して、毫も心を動かさなんだが、今日の坊主ならどんな返歌をするぢやらう、アハヽヽ。

或人が曹洞宗の某和尚に、「天地一ぱいの文字を書て呉れよ」と賴むと、和尚は大きな唐紙一面へ眞黑な墨を塗抹して、さあこれが、

暗の夜に啼かぬ鴉の聲きけば生れぬさきの父ぞ戀しき

で天地一ぱいの文字ぢやと云うたさうだが、眞黑では一枚禪ぢや。半分黑半分白にせねば面白くないよ。

柳は綠花は紅は長安大道に入る直只中ぢや。坐禪の眞只中ぢや。併しこれと共に飜つて、柳は綠ならず、花は紅ならずと云ふ境涯をも會得せ

ねば本統の柳綠花紅の妙處が解らぬ。

から〳〵と石橋渡る下駄の音遠い事かな遠い事かな

で、道は遠きに在らず却つて汝が足下に在りぢや。さあ其處に活けてある紅白の芍藥を即今墨繪にする事が出來るか什麼ぢや。

禪僧は只一句だけでも後世學者の爲になる名言を遺さねばならぬ。自分に文字が無ければ古人の句を借つて「八角の糞空裏に走る」とでも何とでも好い、是非死際に一句なければ面白くないとしたものぢや。衲も只の默雷では不可ぬから、何か一句後世に遺して置きたいよ。

歷代の祖師には大抵語錄がある。語錄のないのは、妙心寺の開山關山國師だけぢや。國師は眼に一丁字もない人ぢやつたが、黃檗の隱元禪師が來朝した砌、各山を廻つて祖師の語錄を勘査した事がある。其時妙心寺だけには開山の語錄が殘つて居ないので、ハハア語錄もない開山とは拙らぬ開山だなと、內心大いに之を貶して居た。すると寺僧が開山には語錄のなかつた代りに、こんな語が殘してありますと云うた。それは彼の有名な、

柏樹子の話に賊の機あり

と云ふ一句ぢや。隱元禪師は之を聽くや、悚然として舌を卷いて怖れ戰いて、三拜九拜したとの事ぢやが、眼に一丁字が無くつてもこんな一句を遺せば足れりぢや。

賣茶翁は其臨終の際に、拂子や如意や茶器や平生自分の愛玩して居た器具一切に引導を渡して、燒捨てゝ仕舞うた。燒捨てるよりも誰かに紀念として贈れば好さゝうなものぢやが、其言草が面白い。

「衲が死んだら此器具は皆知音を失うたとて泣くのが可愛さうぢやから、先づ引導を渡して火葬をして遣るのぢや」と。

博多聖福寺の仙崖和尚も、其在世中からちやんと自分の涅槃像に會下の居士大姉や坐右の器具までが涕泣して居る處を描いて置かれた。それは和尚が團扇片手に床の上に寢轉んで居ると、松の梢に和尚好物の苞納豆がぶら下つて居る。恰で納涼か晝寢のやうな涅槃像ぢやが、衲も今の內からこんな涅槃像を拵へて置きたいが、衲は夏景色より冬景色の方が好きぢや。

床に掛けてある畫幅か、それも仙崖和尚の墓の圖ぢや併し其賛、

坐禪して人は佛になりたるが私も達磨になつて見せましよ

とは人眞似をする見識のない墓ぢや。何も墓は墓で好いよ。

坐禪して元の古巢へ墓

とは發句になつて居るかな、歸家穩座と云ふ所ぢや、アハヽヽ。

此寺の開山堂に菩提樹がある。これは開山千光國師が手植の菩提樹で、即ち我が日本に移植せられた最初の菩提樹ぢやさうな。

衲は頃日小さい苗木を取つて來て盆栽にして愛玩して居た處が、狗子奴が出て來て皆其葉を喰ひ荒して仕舞うたよ。アハヽヽ。これも奪境不奪人と云ふ處に似て居る狗子かナ。狗子は今此緣の下に二匹居る、一匹は白で一匹は黑ぢや。それで白を有佛性黑を無佛性と名を命けてあるが、寺の狗子は飢えて居ると見えて、何でも喰ひよると見えるナ、アハヽヽ。

延促劫地とは時間空間を伸縮自在にするので、坐禪は宇宙を芥子粒ほどの小さゝに縮める事も、芥子粒を地球ほどの大さに伸す事も、千萬年の日月を一刹那に縮める事も出來るし、又雀や鴉の言葉迄も解るとは、いかな博言學者も三舍を避けるぢややらう、アハヽヽ。

十五、本尊は美人

衲が未だ肥前の平戸に居た雛僧時分に聽いた話ぢやが、維新以前の頃、此肥前に名は忘れたが、一人の面白い飄逸洒落な禪僧があつた。新たに某寺を建てたにつけて、本尊佛の入用が出來たので、檀家の重立つた者共が寄り合うて、いろ〳〵相談を始た時、此禪僧の曰くに、

「衲は京の本山で修業を積んだ者ぢやし、京の名高い佛師にも知邊があるからナ、本尊佛の事なら萬事衲に任すが好い」

と引受けたので、檀家の者共は一杯喰はされるとは知らず、

「そんなら和尚様何分よろしく」

と、一同頭を下げて賴んだ。數百兩の小判を前へ並べてぢや。

「うん諾々」と直に檀家から預かつた數百兩の小判を懷中にして、肥前を出立、道中悠々として京へ上つて來たが、京は花の都、女の都ぢや。土臭い肥前の田舍とは違うて、眼に見ゆるものは皆面白いわい。つい本尊佛の事も忘れて仕舞うて、今日は祇園、翌日は島原と小判を撒いて浮れ廻つた揚句、一人の綺麗な太夫を落籍して、嚢中無一物となつたまゝ歸國した。檀家の者共は皆々首を鶴のやうにして待ち兼ねて居た所へ、

「さあ有難い佛様を買うて來た」

と一棹の長持を持出されたので、皆々合掌拜跪してどんな有難い佛様かと思つた。

すると和尚が恭々しく、

「さあ拜まッしやれ」

と長持の蓋を取上げると、中には光明赫灼たる本尊佛があるかと思ひの外、恰で左甚五郎が彫り上げた京人形のやうな美人がヌッと現はれ

て、優しく會釋を施したので、一同は喫驚仰天して居ると、和尚は、

「アハヽヽ、これは木や銅で拵へた佛樣では御座らぬぞ。浮世の酸いも甘いも知り拔いた佛樣ぢや」

と云つたので、檀家一同も先づ膽玉を拔かれて怒る事も出來ず、果はこんな美しい佛樣なら私の佛壇へも一體づゝ買うて來て貰へば好かつたと、大笑ひで事濟みとなつたさうぢや。

人の意表に出るのは隨分面白いものぢやが、彼の博多聖福寺の仙崖和尚にもこんな逸事が多いよ。それは或金滿家が其家の新築祝ひに和尚を招待して、何か祝ひの歌でもと賴んだ時に、和尚は諸々と紙を展て、

ぐるりつと家を取卷く貧乏神

と一句書かれたので、主人は之を讀んで大いに不興な顏をして居ると、和尚は「アハヽヽ」と哄笑して其次の句に、

「七福神は外へ出られず」

又檀徒の某が、

「何か芽出度い句を書かれよ」

と乞うた時に、

爺死ね婆死ね親死ね子死ね

と云ふ語を書いて與へられたので、其檀徒は、

「此句が何故芽出度いか」

と怒り出した。すると和尚は、

「これほど芽出度い事はないぢやないか、爺の次に婆が死んで、婆の次に親が死んで、親の次に子が死んで、子の次に孫が死ぬ、これが順當の死樣で、これほど芽出度い事はない」

と云はれたので、相手の檀徒も成程と感服して、今でも其書幅を家寶と

して子々孫々に傳へて居るさうぢや。

華香居士の出品畫雁一羽に付ていろ〳〵異論があるやうぢやが、一休禪師にこんな詩があるよ。

一雁呼友作兩雁、三雁四雁五六雁、雁去雁來無限雁、雁雁雁雁雁雁雁

又加賀千代女の句ぢやつたか「初雁やまだあとからも〳〵」と云ふのがある。兎に角坐禪の上から云ふと、雁一羽でも花一輪でも、其一羽一輪の處に妙處があるものぢや。一華開いて天下の春を知り、一葉落ちて天下の秋を知るで、雁一羽の外に群飛せる幅外の雁をも看取せねば、未だ共に繪畫の美を語るに足らぬやうに衲は思ふナ。

十六、左邊底の故事

此室の扁額「左邊」かな。これは妙心寺の故無學和尚の書で、左邊とは五祖法演禪師の故事から取つた室名ぢや。建仁寺も東山と云ふが、法演禪師の住庵も亦支那の東山と呼ぶ處に在つたので、此禪師の會下に南堂の靜禪師と云ふがあつた。雲衲時代から手にも足にも負へぬ卓犖不羈の人ぢやつた。流石に師匠の法演禪師だけは深く其法器なるを看破して居られたが、同參の大衆は皆餘りの亂暴狼藉に、毛蟲か蛇蝎のやうに忌み嫌うて居た。後掟に觸れて僧堂を逐ひ出されて、近傍の米春小屋へ入れられた事がある。すると禪師は之に懲りて精出して米を白げるかと思ひの外、結句掟嚴しい僧堂よりもいくら此米小屋の方が氣樂か知れぬとて、日々酒買うて來ては飲む、肴求めて來ては喰ふ、鳶を獲る、猫を殺す、實に凄まじい事を遣つて退けた。恰で栴檀林の獅子のやうにこゝに踞座して、自ら此米春小屋を東山左邊底と號して居たのぢや。それで丁度建仁寺も同じ東山ぢやからその故事を取つて室名としたのぢや

が、左邊亭の上に東山の二字を冠らせて「東山左邊亭」と讀まねば一段の趣味がないらしく感ぜられるよ。

此法演禪師は、後白雲禪師の法嗣で、其禪風は峻嶮惡辣、スウ――と人の知らぬ間に腰巾着を切る名人ぢや。公案に由て坐禪工夫をする事を始めたのも大抵禪師、我日本に傳はつて居るのも即ち此東山下の禪風に外ならぬのぢや。殊に面白いのは、禪師が法嗣に擧げられた時、先師白雲禪師からの大衆が、宛ら西瓜畠の如くゴロ々々と大勢集つて居たのを、禪師は此野鬼閑神、一番大掃除をして遣らうと考へた末、或日祇園島原のやうな狹斜の巷から美妓大勢を招いで、絃歌鼓笛の大散財を遣らかしたぞると驚いたのは一山の大衆で、あゝ今迄こんな惡魔に隨身して居たとは知らなんだと悉く愛想を盡して四方へ退散して仕舞うた跡でぢや、禪師はあゝ斯樣氣持の清涼した事はないと、悠然と禪榻の塵を掃つて、新たに僧鳳凰を養ふこと三千、忽ち東山下の禪風を天下に振起するに至つた。今日僧堂に於ても亦師家の代る度毎に一時大衆の退散を命ずるを定例とするのは、即ち此法演禪師が美人軍を以て大衆を追捲られた遺風であるのぢや。

公案は魔箭を防ぐ天帝釋の楯のやうなもので、此楯に據れば兎の毛の隙も敵に窺はるゝ氣遣ひはない。又公案を敲門の瓦子に譬へて、此瓦子を以てコツコツと關門の屏を敲く、扉が開いた後は瓦子に用はない、すぐ路傍の草に捨つるとしたものぢや。此公案がなか〳〵透り難い、これを法窟の爪牙と云て、爪牙の無い坐禪は駄目ぢや。併し學者は却々此爪牙を拔け切らぬ。大體坐禪の學者は境内の洗鉢池に湧いて居る蝌蚪のやうに百匹に一匹より物にならぬとしたものぢやテ。

觀自在菩薩は耳根から悟入せられた菩薩ぢや。耳根圓通と云うて、人

問は耳が最も鋭敏なので、白隱禪師も彼の隻手音聲の公案を擧して、耳根悟入の菩薩たらしめんとせられたのぢや、それ向うの泉水に蛙がカラ々々、鯡鯉がチヤブチヤブ。甲を干して居た龜がドブンーと陷りよつたが聽えたか。

頃日東京の「禪」雜誌を發行する一喝社から、衲に夏の感想、避暑法、最も涼かりし事の三箇條の答案を求めて來たので、只一句「あゝ暑い」と返答を與へたが什麼ぢや、此一句中に三箇條の答案が籠つて居るよ。

これは或僧が洞山和尚に、

「寒暑到來如何が廻避せん」

と問うた時、和尚は、

「無寒暑の處に向つて去れ」

と答へた。僧が更に、

「如何か是れ無寒暑の處」

と云ふと、和尚は、

「寒時は閻梨を寒殺し、熱時は閻梨を熱殺す」

と答へたのと、又僧が曹山和尚に、

「恁麼に熱す什麼の處に向つてか廻避せん」

と問うと、和尚は、

「鑊湯爐炭裏に廻避せよ」

と答へられたと一般ぢやが、「あゝ暑い」これは雪氷を嚙むよりも涼しい避暑法ぢやぞ。

十七、日蓮の禪機

日蓮上人は、流石に傑僧ぢやつた。彼の八釜しい四個格言「念佛無間、禪

天魔、眞言亡國、律國賊」は確かに公案になるよ。上人が曾て法難に逢うて刑戮せられんとした砌、鎌倉幕府に命乞をして之を救うたのは建長寺の大覺禪師で、上人は暫らく其因緣で大覺禪師の下に典座（飯焚きのこと）をして居られた事がある。其時に此四個格言が出來たので、最初大覺禪師が四個格言を問はれた時に上人は唯「念佛無間、眞言亡國、律國賊」と云うたまゝ絶句して、最後に大覺禪師を磕と睨み付くるや否や、「禪天魔」と喝破したとの事ぢやが、之を聽かれた大覺禪師は、其時どんなに嬉しかつたぢやらう、禪天魔は決して毒罵ぢやないぞ、これほど禪を譽めた語はない。天下の瞎漢は皆之を知らずに居る、眞個に五逆雷を聽くが如き好語ぢやテ。

既や梅雨になつたな、坐禪はこんな日にすると好い。禪の乾く間もなし五月雨の今日もふり〳〵。翌日もふり〳〵と云ふ誰やらの狂歌がある。左樣ぢや、禪で想ひ出したが、衲は無禪と云ふ落款を拵へて持つて居るよ。つまり默雷が虎の皮の禪を落して、天眞爛漫の赤裸々となつた處ぢや、アハヽヽ。人間はフリマラの無禪でも恥ぢぬほど天眞爛漫の境涯に到らねば駄目ぢや。

衲が未だ妙心寺の僧堂に修業して居た時、半風子を一ぱい湧した事があるうづ〳〵と痒いくて堪らんので、そつと其襦袢を庭の垣根へ脫ぎ捨てゝ、素知らん顏をして居た處が、それを何時しか聖侍寮が見付けて、一同に申渡した言葉が面白い。

「誰か知らんが大衆中に庭の垣根へ襦袢を脫ぎ捨てゝ置いたものがあらう、私が見付けた時、あゝら不思議や其襦袢は手足もないのに獨りで歩き出した、近寄つて熟く〳〵見ると襦袢が歩き出す筈で、半風子が一ぱい湧いて居る、あんな物を默つて脫ぎ捨てゝ置いては不可

ん誰が捨てたのぢや、隠さずに言はつしやい」

と、ぢろ〳〵一同の顔を睨み付けて申渡したが、併し衲は未だ其時心の垢が取れて居なかつたので、恥かしくて〳〵堪らん、迚も衲の襦袢ぢやつたと名乗り出る勇氣がないので、皆々默つて居ると、遂々襦袢の主が知れず仕舞ひに濟んだものゝ、こんな事位ゐが恥かしいやうでは到底無禪の境涯を語るに足らぬ。

最一つの失策は夏の暑い盛りぢやつた。衲が汗浸んだ灰色の褌を洗濯する積りで盥へ漬けて置いた處が、師匠も同じく褌を洗濯する積りで出て來て、不圖盥に衲の褌が漬けてあるのを見て、先づ衲の褌を白く雪のやうに洗濯して竿へ乾してから、師匠自身の褌の洗濯に取懸られた事がある。それを思ひ出すと、あゝ勿體ない事をしたと今でも慄然とするよ、アハヽヽ。そりや落欵は無禪でも禪はしつかり締めて居る。

十八、何故これが圓い

先年某處に居士大姉の集會があつた處へ行つて、衲は疊へこんな○(圓相)を書いて、皆々に、

「なぜこれが圓いか」

と問うたが、誰一人ビシリと道ひ得た者がなかつた。あんたなら什麼答へる。これも又先年蜂須賀家菩提所の阿波興源寺に大接心があつた時ぢや。衲も隨喜して行つて彼地の居士大姉に、

「彼の阿波鳴門は左へ渦卷いて居るか右へ渦卷いて居るか」

との公案を與へたが、これも亦誰一人道ひ得た者がなかつた。其後裁判官で根氣好くも態々來京して獨參した者もあつたが、矢張り的を翦れて居た。さあ阿波鳴門は右へ渦卷いて居るか左へ渦卷いて居るか什麼

ぢや。

松田と云ふ檢事が坐禪をしたが、一向出來なんだ。それに碧巖集や葛藤集を買求めて、これも解つて居る、あれも解つて居ると、○印を付けて喜んで居た。此間河野某が誰かに「行到水窮處、坐看雲起時」の語を書き與へた事が新聞紙に載つて居たが、今からこんな語を振舞はすのは小癪ぢや。衲は決して受取らぬよ。いくら惡く云うても矢張り鳥尾得庵居士は偉かつたと思ふ。

愚溪和尚は蘇山下四哲の一人で博多聖福寺の仙崖和尚から三代目で、却々の遣手ぢや。圍碁が一番の道樂で、若し烏鷺の激戰最中に小便でも催すと、おい一寸待つて呉れと、碁盤を引抱えたまゝ厠圃へ這入つて、八角の糞をひりながら籌を運らす、勝利がないと思ふと、そつと一二目胡魔化して置いて厠圃を立出でゝ來られる癖があつたさうぢやが、これが無心の遣方ぢやから面白い。

社會活動の中心が、即ちこれ坐禪の眞只中ぢや。政治家は爲政の上に、文士は筆の上に、軍人は劍の上に、農夫は鋤鍬の上に、商人は算盤玉の上に、それ〳〵坐禪を働かして居るのぢや。それを皆々自覺せずに自ら求めて煩悶苦惱の地獄に墮在して居る。坐禪は決して隱遁主義のものぢやない、積極進取主義のものぢや。金剛王の寶劍を眞向大上段に振翳して戰鬪するのぢや。それコツコツと打つ鋤鍬、バチバチと彈く算盤玉、これ皆坐禪の眞只中、獅子吼と聽けば獅々吼にも聞えるが解るかナ。

十九、蚤と虱の禪機

あんたはなぜ蚤の色が赤く、なぜ半風子の脊中にゝと黑い斑點があるのか知つて居るか、知らねば話して聽かさうかな。それは昔蚤と半風

子と喧嘩しよつた事がある、乃で半風子が惡計を案じて態々蚤を我家へ招待した上、さあ先づ風呂が沸いて居るからお入浴りと云ふと、蚤は惡計に擢るとは知らず、そんなら一汗流さして貰ひませうと涼しさうな浴衣を脱捨てゝザブリと湯槽へ飛び込んだ。其油斷を見澄した半風子はいきなり上から風呂蓋をして竈の下を嚇々と焚き付けるわ〳〵、中に居る蚤は恰で焦熱地獄の苦患で、熱い〳〵と狂ひ廻つた末、風呂蓋の隙間を見付けてピンと飛び出すや否や、奴と其處に在合せた割木を手に取るより早く力任せに半風子の脊中を撲り付けた、それで今でも半風子の脊中にゝと其時の疵が殘つて、手酷く痛棒を喫された名殘に體がベチャと扁平になつて居るのぢや。又蚤も既の事に風呂の熱湯で蒸殺さるゝ處ぢやつたので、那樣に體が赤くなつて居るのぢやさうなが面白いナ、アハ、、。いやこれは蚤が風呂から飛び出すとすぐ割木を取つて半風子を撲り返した捷技を稱揚したので、坐禪の學者も斯う云ふ風に擊石火閃電光の機智がなければならぬとの例話ぢやが、此活社會に處して活事業を成す者にも、亦此蚤以上の蚤取眼と云ふのが最も肝要ぢやテ。

師家は學者に點滴も施さぬ。下手に觸つて老婆親切を加へると、取返しの付かぬ不具になる。白隱禪師も學者の見性を丁度蟬が殼を拔け出るやうなものぢやと云うて居る。無理に手を加へて殼から出して遣ると、其蟬は殼から出る事は出るが、飛ぶ事も鳴く事も出來ずに死んで仕舞ふ。それで悟道の見性は機の熟するを待たねば駄目ぢや。彼の麹栗を見よ、時到れば自然にパチリと彈け出して其實の旨味いと此上なしぢや。坐禪は勿論凡て成功の的を射落すには急かず騷がず氣根を續けるのが第一義である。

衲はいくら其色が美しうても西洋の花卉は嫌ひぢや。日本の花卉の方に言ふべからざる趣味がある。そりや禪坊主には大揀擇がある。此大揀擇がなくて什麼するか。床に活けてあるのは紫白の燕子花ぢやが、日々居士大姉が交る〳〵挿し代へて置いて呉れるので芍藥、蘭、辛夷、百合など坐ながらの花畠ぢやなに、

起てば芍藥坐れば牡丹歩く姿は百合の花

の句が面白いと云ふのか、これは十身調御と云うて、坐禪の最も八釜しい處に適うた句ぢや。無心に唄うて居る俚歌童謠には時々こんな悠遠深長な禪味の籠つて居る者を見出すよ。

芭蕉の發句、

古池や蛙飛び込む水の音

も坐禪の公案になつて居る。芭蕉が創作の意は知らぬが、衲は此古池の古の字が眼目ぢやと思ふ。唯ドブン！の水音が正風の基を開いた獅子吼ぢやと思はれるが、江湖に此ドブン！の俳味を解する俳人はあるぢやらうか什麼ぢやらう。

彼の棒喝の禪風を振ひ起した德山禪師の法嗣巖頭和尚は、會昌の沙汰に逢うて渡子となつて菩薩行をせられた程の遺手ぢやつたが、後遂に强盜の爲に斬殺せられた時にぢや、

「痛い〳〵苦い〳〵」

と凄まじく叫喚せられる聲が、數里四方に聞えたと云ふ事である。それを白隱禪師が未だ雛僧の時分に其傳を讀んで知つて、こんな名僧がなぜ卑怯にも痛い〳〵苦い〳〵と叫喚したかと、流石に白隱禪師ぢや、早くも此扇要に着眼して骨折られた末、廿四歳の時越後高田の住庵で、初めて見性悟道をせられた際にぢや、成程雛僧の時分から疑問として居

た、痛い〳〵苦い〳〵と叫喚した巖頭和尚は偉い。和尚は決して死んで居られぬ、それ此通り今でも生きて居られると、雀躍して喜れたさうぢやが、坐禪の出來れば出來る程痛い〳〵苦い〳〵ぢや。

一休和尚が臨終の際にも亦弟子が何か一句遺偈を聽きたいと乞うと、和尚は、

「只死にともない」

と云はれたずると弟子は是も平生の洒落戯談かと思つて、是非一句遺偈をと重ねて乞ふと、今迄端坐瞑目して居た和尚は、此時振威一番再び、

「死にともない」

と大喝せられたとの事ぢやが、これ第一の箭は尚輕く、第二の箭は重しぢやテ。

芭蕉の古池の吟は此間も云うた通り、古池やの古の字が眼目ぢやが、凡て祖錄などを讀む時に古の字があれば能々注意をして翫味するが好い。僧が趙州和尚に、

「古澗寒泉の時如何」

と問うと、趙州は、

「苦」

と答へ、

「之を飲みて後如何」

と問ふと、

「死」

と答へて居るが、此古澗寒泉の古の字も亦古池やの古と同じく、玄目玉で讀破すると決して並々の古の字ではない、古今を超絶した古の字であるのぢや。

二十、元亨以上の僧

衲の愛誦して居る仙崖和尚の偈に

佛會人天稱八萬、孔門弟子亦三千、山僧獨坐藤蘿下、時看浮雲過眼前

と云ふのがある。これは實に凡聖以上の高い見識で、浮雲とは何を指してゐるのか、唯平仄を弄して居る詩人などには窺知する事の出來ぬ偈ぢやぞ。故獨園和尚のにも、

一箇說仁事已煩、五千餘卷亦多言、山僧不蹈二翁跡、高臥秋風落葉村

と云ふのがある。これ仙崖和尚のと同曲。妙處語らんと欲して口啞の如しの境涯である。高臥とは浮世捨てゝの山中住居ではない、十字街頭に立働いて居る時にも女娃童孺と談笑して居る時にもあるもので、衲の未だ雲水時代はこんな偈ばかりを集めて喜んで居た。建仁寺の歴代中に、

生平不作腐儒語　自許元亨以上僧

と自ら元亨釋書以上の高僧を以て任じて居た天章と云ふ和尚もあつたよ。

京は釣鐘の都ぢや。此頃短夜のほの〳〵と白み出すと、寺々の曉鐘があちらにもゴーン、こちらにもゴーンと響き渡つて鴉がカア、雀がチユ、汽笛がピユ、孩子がオギア、蚊がブンと朝から晩までそれは〳〵聲の絶間なしぢや。此聲の次に多いのは千種萬樣の色で、

染め出す人はなけれど春來れば柳は綠花は紅

と云ふ歌の如く、眼に見ゆるものの色ならざるは莫しである。美人を見たら雪隱で糞する時を思へなど云ふのは、逆を以て順を制する下根の事、いかに美しい女色でも、それ此通り美しい〳〵になれば、跡方も無くな

つて仕舞うのぢや。

煩惱もこゝに至ると盜人を捕へて見れば我兒なりで、決して他人ぢやない。

昔蜂の巣と瓢簞の嫌ひな二人の武士があつた。或日瓢簞嫌ひの武士が蜂の巣嫌ひの武士を茶に招いで、床の置物に珍らしい峰の巣を飾つて誇つて居た。すると茶に招かれた武士は何よりも嫌ひな蜂の巣があるので、碌々茶も飲まずに逃げ歸つてこれを遺恨に思ひ、此儘泣寢入つては武士の一分が立たぬと、愈よ眞劍勝負をする事になつた。處が却々勝負が付かぬので、一人の方がこゝぞと蜂の巣を突き出すと、一人の方もさあこれでも兜を脱がぬかと瓢簞を突き出したが最後、ハッと双方左右へ逃げ出して、どちらも怪我なしに事濟となつたと云ふ話があるが、これほど蜂の巣や瓢簞に、好き嫌ひがあるとは却々禪味があるナ。

廿一、坊主が社杼

毀釋論の盛んな維新の際、小口から佛刹寺閣が破壞せられるので、天下の緇徒が八釜しく不平を唱へ出した時にぢや、政府の役人が「そんなに不平を唱へるのなら皆元の天竺へ去んで貰ひませう」と遣つて除けたので、これには流石の僧侶も弱つたさうぢや。確か紫野大德寺へぢやつたか、禮服着用で役僧に出頭せよとの命令が下つた處が、どんな禮服を着用して出頭すれば好いのか解らん、遂々坊主頭に社杼を着用に及んで出頭したと云ふ狼狽方ぢやつたので、これは一休樣の洒落にもない圖ぢやと、叢林の一笑話となつた事もある。

其頃四條橋の欄干には蓮華牡丹の彫物がしてあつたが、衲はそれを初めて見て、はゝあ京は流石に佛法の土地ぢや、こんな時勢でも矢張蓮

華牡丹の彫物がしてあるなと思つた事がある。今でも四條橋の彫物は蓮華牡丹かナ、なに祇園團子に櫻の花か。

僧堂生活は、苦しい中にも忘られぬ樂しさがある。衲が梅林に居る頃、僧堂の清規としては夏冬なしに一枚の蒲團を柏餅にして寢るのぢやが、衲は大の寒がりぢやつたので、助香の惟山和尚と云ふのと相談の上、或夜そつと病僧に用ふる蒲團を盗んで來たものゝ、見付けられると痛棒を喰ふから大衆の寢靜まるのを待つて着る。大衆の起きぬ先に起きて片付ける。其忙しいこと一枚の蒲團の爲に安樂に寢る事も出來ぬので、あゝ惡いことは出來ぬものぢや、矢張寒い方がいゝと、其蒲團を元へ返して置いた事があるが、人生も亦此蒲團を大きくしたやうなもので、皆自繩自縛で苦しんで居る者ばかりぢや。

此間の日出新聞に、曹洞宗の奕堂和尚の半風子の話があつたが、彼の半風子は只の半風子ぢやなからう。丁度百丈禪師が侍者に火を持つて來いと云ふと、侍者は正直に火は消えてありませんと答へたゞすると禪師は、爐灰を搔き探して豆の如き火を摘み出し、それ看よとの言下に其侍者が大悟徹底したと云ふのと同じて、奕堂和尚が雲衲に半風子を湧して居るかと問はれたのも、必ず襟の寶を指したのぢやらうと思ふよ。

江州伊香の片山璞と云ふ人から、塗毒鼓中の衲が圓山花見の時の放屁、八角の糞などの話を面白い書に描いて送つて來たが、禪はこんな屁や糞や汚い物ばかりと思つては眉鬚が墮落するよ。牡丹芍藥は愚か、爛爛と錦の御旗の飜へるやうな美しい處もあるのぢや。なに、

三級浪高魚化龍、　痴人猶戽野塘水

かな、左樣ぢや、三級とは禹門の瀧が三段になつて落ちて居るのを云うので、即ち參禪問道の學者を鯉の瀧登りに喩へた語ぢや。此瀧は却々容

易に登れん瀧ぢやぞ。大抵の鯉は岩石でコツリと鼻打つたり頭打つたり、三十六鱗忽ち龍と化する者に至ては千尾に十尾も無い。口頭ばかりで腸の無い坐禪は、丁度五月鯉のやうなもので、迚も此瀧を登る勇ましい鯉群には入れぬよ、所謂痴人猶犀野塘水ぢや。

廿二、耳根圓通の三昧

彼の廿五菩薩の中でも、此龍門に登り得たのは、觀音大士只一人で、他の菩薩は皆々點額して能く此瀧を登り切らなんださうぢや。勿論菩薩の事ぢやから夫々悟道の見地は持つて居るが、其中一番悟道の方法の宜かつたのは觀音大士で、これは耳根圓通の三昧を得て居た。ス――と水を觀じて悟入した菩薩もあり、鼻を觀じて悟入した菩薩もあるが、鼻で悟入した大菩薩は、最初鼻頭が白くなり、次に顏中が白くなり、遂に大千世界までが白くなつたさうぢやが、人間には耳根圓通の三昧が一番入り易いので、觀音大士一人及第せられたのぢや。それ奔雷を聽くのも蚊虻を聞くのも、皆此耳根の働きぢやらう。

經文には、動物の出生を胎卵濕化の四種に分けてある。濕の部は蚯蚓や蛞蝓。胎の部は衲等人間や狗子。卵の部は雀や鷄の類。化の部は腐草螢に化するとか、子子の蚊になるのを云ふのぢやが、衲等人間は此胎生計りでなく、坐禪の上からはすぐ龍となつて雲を呼び、虎となつて風を起し、猫とも鼠とも自由自在に變化の出來る神通力を持つて居るが、これ王母の桃を美まず自ら仙家の棗ありぢやテ。

九州地方では墓の事をワクと云ふと見えるナ。それは或人が彼の博多聖福寺の仙崖和尚に七福神か何か金儲けのできる繪を描いて與れよと賴んだ時に、和尚は、よし〳〵と墓二四を描いて與へられた。すると

或人が、

「なぜこれが金の儲かる繪か」

と尋ねると和尚はアハヽと笑つて、

「これは金銀がワクワクぢやないか」

と洒落られたさうぢやが、今でも錢入の事を墓口と云ふのは、此ワクワクから起つた名ぢやなからうか。京都では餘り仙崖和尚の逸事を知つて居る者はないが、和尚は却々の遣手の上に俳句も俳畫も上手ぢやつた。衲の知つて居るだけでも、大黑と布袋と壽老人の畫賛に、

三服を一服にして萬服茶

と、又尻をひん捲つた男の畫に、

睾丸を打出すがよし夕納涼

と云ふ天地を尻の下に敷いた見識の高い句がある。白隱禪師の達磨賛、

よしあしの葉をひつ敷いて夕納涼

と云ふのに似た句ぢや。禪師にも、

初夢や一富士二鷹三茄子

と云ふ名句がある、今日の俳句にもこんな風に禪味を加へたら面白からうと思ふよ。

文士が筆三昧に入り商人が算盤三昧に入るのは、事理一致と云うて、即ち菩薩の修行である。一寸見ると世の中の人間は皆齷齪として無用の仕事ばかりして居る、恰で蛙がピョコ〳〵と柳の枝へ飛付いて居るやうな風に思はれるが、併し蛙は蛙の腹一杯の仕事をして居るのぢや。此時は蛙の天下ぢや。獅子でも虎でも之を傍觀して蛙に花を持して遣らねばならぬ。アハヽヽ。今日は何でも議論や理窟の八釜しい蛙の天下ぢやが、併し蛙は蛙ぢや、いくら騷いでも眞理を動かす事は出來ん。世界

はどうもならん、過去も現在も千萬年の未來も、此儘の眞理此儘の世界ぢや。

松平越中守の歌に、

一匹の鼠あらさふ鳶鴉一文錢にたかる乞食

と云ふのがある。乞食と云へば、芝增上寺の行誡上人は、乞食に出逢ふと、乞食は無慾な者ぢやとて恭しく禮拜せられたさうぢやが、我々が乞食を尊敬をして堪るもんか、若し乞食に落ちても、空手で瓜を取つた大燈國師のやうな乞食にならねば駄目ぢや。

廿三、眞言宗の妻帶

新義眞言宗に妻帶問題が持上つて居るさうぢやが、實に天下の笑物ぢや。そんなに嬶が欲しければ還俗すれば好いよ。假初にも寺を持つて居る以上は、妻帶畩肉などは最も愼まねばならぬとしたものぢや。それに萬事洒落な禪宗ならばいざ知らず、戒律の最も嚴肅な眞言宗にこんな問題の持上るのは不思議な心地がするが、これ爲るなと云ふ事を仕たがる人間の弱點であらう。又妻帶の理由に六ケしい理窟を並べるのは不可ん。唯あゝ嬶が持ちたい、鯛が喰いたい――と正直に云うた方が未だしも無邪氣で面白い。兎に角眞言でも禪宗でも、嬶が欲しい坊主は先づ頭が圓いか四角いか鏡と相談するが好い。若し頭が圓ければ嬶などを持つては大法に對して濟まぬ、若し頭が四角いと思へばさつさと嬶持つて還俗するが好い。或者が故獨園和尚に、

「今日の坊主は前から見ると坊主ぢやが、後から見ると俗人ぢや」

と云うた。すると和尚は、

「いや半分々々位ならどうか堪忍して遣れ」

と云はれた事がある。處が此頃の坊主は段々墮落して僧三俗七の化物になつて仕舞うた。其證據に昨今東京あたりでは袈裟法衣は鞄に入れて、皆々羽織袴で歩いて居る相ぢや。而して袈裟法衣は一寸讀經の時に着る丈けの事ぢやさうナ。

いや釋迦在世の時代は實に戒律堅固なものぢやつた。殊に彼の六群比丘の如きは戒律嚴肅恰で禮義三百威儀三千、起てば芍藥坐れば牡丹と云ふ風で、一例を擧ぐると、油入れを捧ぐるのに毫しも傾かさず、坐る時も紙一枚置いて其紙のバッと風立たぬやうに坐わると云ふ位ぢやつたが、それでも釋迦は此六群比丘を破戒の甚しいものと仰せられた。若し釋迦が今日の妻帶問題を聞かれたら、それこそ何と云はれるぢやらう。なに久米仙人の居た大和の久米寺か、あれも眞言宗ぢやが、成程眞言宗に帶妻問題の持上るのも萬更偶然ぢやないナ、アハヽヽ。

京は流石に本山の土地でそんな事はないが、田舍へ行くと坊主が嬶持つたり殺生するのは當然になつて居る。衲の未だ雲水時代にぢやが、肥前鹽田の光桂寺と云ふ寺へ、一人住職が欲しいと態々檀徒から賴んで來た。すると幸ひ一人あつたので世話する事になり、此人は年は若いが女嫌ひで、肴も喰はぬ道心堅固な人ぢやと、一廉檀徒を喜ばす積りで仲人口を利いた處が、檀徒は怪訝な顏付をして、

「お世話は一寸待て下さい、年の若いのに女が嫌ひで肴を喰はぬ坊樣とは、そりや不具で御座りませんか」

と云うた笑草があるが、

春有百花秋有月、夏有涼風冬有雪、若無閑事掛心頭、便是人間好時節

と云ふ偈があるが、斯うなると天下太平ぢや。ウム床の掛軸か、あれも仙崖和尙の牧童圖ぢや。

うなゐ子のかへるやいづこ吹笛に鹿の音そうる野邊の夕ぐれ

とは面白い賛ぢやナ、彼の牧童は笛吹いてどこへ歸るのぢやらう、アハヽ、笛の穴へ歸ると云ふのか、左樣か。

廿四、糞ひつて悟る

又糞の話ぢやが、宋の翰林學士張九成と云ふのは、大慧禪師と同時代の人で、此人は糞放つて居る時に悟りよつた。それは尻の下に居る蛙の頭へドサリと糞をひり當てたので、アッ痛い――ギアトと鳴き出した刹那にがらりと見性したが、こんな糞こそ本統に黄金よりも貴い糞ぢやテ。

眞宗の信徒は佛壇の阿彌陀樣だけに御飯を上げて、一向先祖には供物をせぬ。何故かと問うと、阿彌陀樣に御飯を上げると、先祖は上げずともお腹が膨れると云ふ事ぢやさうなが面白いナ、これ我が禪家の「張公喫酒李公醉」に似て居る。

天子の頭の上でどもお構ひなしに色事をするのは蠅ぢや。常陸山梅ケ谷でも恐れずに螫すのは蚤や蚊ぢや。梟は又梟で人間はなぜ晝寢て夜働かぬぢやろと人間を笑うて居る。萬物はそれ〴〵自家の小天地を作つて居るのぢやが、これは笑ふ事は出來ん。這裡には佛祖も窺へぬ妙處があるのぢや、と斯う活して遣れば天下何物も捨つべきものはない。衲の腹は恰で布袋和尚の袋のやうに、善い物も入れば惡い物も入る、而もスーと入つて一物も滯らぬのぢや。天地を容れても尚餘りある大きな腹となるのぢや。

狂歌師の太田蜀山人は、鎌倉の誠拙和尚と至極心易かつたさうで、或日和尚が羅漢堂でころげて頭を打つたのを見て即座に、

羅漢から落ちて頭を佛菩薩

と遣つた處が、和尚はすぐ、

坊主頭に怪我なかりけり

と下の句を附けられた。鑿と云はゞ槌で、此位敏捷くないと頓智とは云へぬナ。又山人は石の三味線と云ふ題で、

石の三味蔦の葛を絃にかけ秋風吹けばちりつんてんしやん

と無絃琴と云ふ處を詠んだのもある。澤庵禪師にも、

おめしなら歸りたくあん思へども江戸とし聞けばむさしきたなし

と云ふ禪師が佐渡へ流謫せられて召戻された砌詠まれた狂歌がある。博多聖福寺の仙崖和尚も元美濃の人ぢやが、未だ雲水時代に故郷の寺を逐出された折、

雨傘をひろげて見れば天が下身は濡るゝとも蓑はたのまじ

と美濃に知音無きを諷した狂歌一首詠み捨てゝ、飄然と行脚に出られたが、衲はこんな洒落な狂歌狂句の方に、人情の機微を穿つた禪味の饒いのがあるやうに思ふが什麼ぢやらう。

寒熱の地獄にかよふ茶柄杓も、心無ければ苦しみもなし

とは千利休の茶道の和歌ぢやが、坐禪の上から云ふと、此心無ければ苦みもなしは、活機のない死句である。之を彼の二宮尊德翁が、

寒熱の地獄にかよふ茶柄杓は勤めとなれば苦みもなし

と下の句を詠み變へられたのは、流石に尊德翁の面目を現はして居るが、併し未だ八丈を道ひ得たに過ぎぬのぢや。

白隱禪師の都々逸にも、

荒い風にも當てまいものを遣ろか信濃の雪國へ

と云ふのがある。これは信州の某和尚に印可を與へられた時の、達磨の

贊にかゝれた都々逸ぢやそうな。

廿五、阿呆になる修業

數聲清磬是非外、一箇閑人天地間

と云ふ衲の好きな偈語がある、所詮坐禪は阿呆になる仕事をして居るのぢや、いや最初からの阿呆ではない、十分仕上げて後の阿呆ぢや。富んで後の貧、鯛の味を知つて後の精進ぢやが、却々此阿呆にはなれんぞ。壬生狂言でも阿呆の役は上手がする。六ヶ敷もので、箒でも破箒、筆でも禿筆とならねば、未だ共に無功の功を成就する事は出來ぬよ。

立話よりも座談の方が落着いていゝやうぢやナ、座談は腹に力が入るが、立話は口ばかりで腹はぺそ〳〵ぢや。其證據には、此腹の出來てない人間が卓子の前に起つて演說とか講話とかをしても、一向聽衆に感化を與へない。衲は座談には踞地金毛の獅子と云ふ趣があつて好いと思ふよ。坐禪を遣らん人間は切めて毎朝一時間か二時間靜座をする事を務めて此腹を拵へる工夫をすべしぢや。

衲が雛僧の時に、いつも師匠から叱られた事がある。それはお經を早口に讀むなと叱られたのぢやが、其言草が面白い。お前の讀む般若心經は何ぢやべら〳〵と早口で、人偏や言偏や口偏ばかりより讀めて居ないぞ。摩訶般若なら摩訶般若と最と落着いて確乎讀めよと云はれたが面白からう。此腹が出來てなければいくら富樓那の辯を揮つて說敎しても、つまり人偏言偏口偏の亞流ぢや。こんな口頭の事で什麼して聽衆に感化が與へられるものぢやない。

盤珪禪師は明末の道者玄の衣鉢を傳へた人で、此人が我國の長崎へ渡來して初めて不生不滅の禪風を唱へられたのぢやが、不生不滅は一

枚禪ぢやと云うので、乃ち白隱禪師が此已墜の禪風を振起せられたのぢや、さあ此鉢の紫の朝顏の花は生きて居るか死んで居るか。

衲は是迄達磨と觀音の贊だけはした事がない、贊をすればこれ達磨と觀音を汚す事になる、これは衲の見識ぢや。一句でも達磨や觀音の贊が出來て堪るものか、寧ろ白紙のまゝで放て置く方が好いのぢや。併しこれは衲の所藏の達磨や觀音に限るので、他人から賴まれた時は又草に落ちて其人相應の達磨や觀音の贊をして與へるが、斯なると誰も達磨彼も觀音ぢやアハヽヽ。

引き寄せて結べば草の庵にて解くれば元の野原なりけり

とは、誰かの和歌ぢやつたナ。衲は此下の句を「解かねど元の野原なりけり」と詠み替へると一層面白うなると思ふよ。これ玉殿も猶草座の如く、草座も亦玉殿に似たりと云ふ境涯で、所謂絕學無爲の閑道人の住居ぢやが、世の富豪達もちと斯心を以て心として貰ひたいものぢや。榮華は只一輪の白牡丹で事足るのぢや。

廿六、王冠と荷衣

一池荷葉衣無盡、數樹松垂食有餘、强被世人知住處、又移茅舍入深居

との偈を作つた。明州大梅山法常禪師は、達磨の九年面壁どころぢやない、樹下石上、四十年も山を下らずに修業三昧に入つて居た人ぢやが、其見識の高邁なは勿論、精根の强健な事は、後世學者の好い手本ではないか。馬祖と即心即佛の問答をしたのも此禪師で、偶にもある通り平生蓮の衣即ち荷衣を纏うて身を清淨に持つて居られたさうぢやが、荷衣とは夏は清涼で着心が好からうナ。衲も他日朝鮮國王となつた曉は此荷衣ぢやないが、王冠の代りに破蓮の葉を冠つて君臨したいと思つて居

るよ、アハヽヽ。

楊岐山方會禪師の偈にも、

楊岐乍住屋壁疎、滿牀悉撮雪眞珠、縮却項兮暗嗟噓、黯想古人樹下居

と云ふのがある。夏の暑い時にこんなに寒いほど白雪が降つて呉れたら好いが、これが臘八時分の嚴寒に斯う吹雪が禪榻を侵すほど吹き込んでは堪るまい。此偈は即ち深く坐禪三昧に入つて忘れて居たが、ふと氣が付くとこゝは楊岐山の破寺の事ぢやから、ビユウ〳〵と頻りに吹雪が吹き込んで、膝の上まで眞白になつて居る。あゝ寒い――と知らず識らず項を龜の首のやうに縮めたが、いや此位の事は何でもない、樹下石上の修業に比べては何でもないと、再び思ひ返したとの意味ぢやが、古昔の高僧は皆なこんな刻苦をして居られる。今日のやうに僧堂に安坐して居る雲衲達は、二六時中此方會禪師の苦行を心として、聖胎長養に努めねばならぬのぢや。それで白隱禪師も此故事を詠んで雲衲居士を戒められたが、其和歌は、

忘れては寒しとおもふ牀の雪を拂ふひまなき人もありしに

備前池田侯の菩提所曹源寺に儀山和尚と云ふ歴々があつた。一度京都の紫野大徳寺に見えて居た時に、衲も未だ其時分は雲水ぢやつたので、折々參禪した事がある。眉毛の皓くなつた血色の棗のやうに赭い、それは誠に有難い老僧ぢやつたが、此和尚の居士に頗る颯輕な漢子があつて、或日和尚を試さうと思つて美しい應擧の枕繪を持參して見せた處が、和尚は莞爾として其枕繪を眺めた末、

「さあ返さう、君子は一見して再見せずぢや」

と云はれたので、これは實に名言ぢやとて、其頃禪林の佳談になつて居た。さあ一見して再見せずとは何處を指して云ふたのぢや解るかナ。武

藏坊辨慶も亦美人の肌を一見して再見せずぢやつたさうなが、これには却々向上の禪味が籠つて居るよ。

故獨園和尚は提唱の折は至極溫和しい和尚ぢやつたが、其代り室内は暖簾坐禪で、ふわり〳〵と箭を受け流して却々ねつかつた。それで和尚も常々提唱の上手な師家は案外室内の手緩い者、提唱の下手な師家は、其割合に室内がねつい者ぢやと話して居られたが、成程此月旦は正鵠に中つて居るやうで、衲も左様感じて居る。

廿七、大石良雄の禪機

之を思ひ之を思へば鬼神之を助くで、迷信でも何でも精神を純一にして信仰すれば實に恐しいもので、其刹那は決して迷信と誹る事は出來ぬ。乃ち坐禪も亦、暑いなら暑い寒いなら寒いと現成公案に由つて此精神を純一にする修業で、滴水滴凍、到る處主となるに在るのぢやが、這裡に至ると、釋迦、達磨と雖も斯心を窺ふ能はずとしたものぢや。彼の大石良雄が故主の仇敵吉良上野介を附狙うて居た時、自ら晦まして墨染の一力に遊女風情と面白くない千鳥などをして戯れて居た。折しも故主の命日も構はずに蛸喰うて、酒席に紛れて居た間諜をして、はゝあ故主の命日にさへ精進せぬやうな不忠の臣、迚も仇討などはすまいと油斷せしめたと云ふ話があるが、これ大石良雄に坐禪の出來た上、純忠無二の至誠が、自然と此滴水滴凍の境涯に入らしめ、斯く間諜に此腹を窺知せられなんだのぢやなからうかと思はれるナ。

衲が一年中で一番苦しいものは、布薩式に梵網經を讀む時ぢやが、經中の十戒を講誦する時は衲即釋迦で、一擧する拂子には塵尾の威令があるのぢや。布薩は建仁寺に於ける最も莊嚴な禮式で、小笠原流の禮式

の根本、白槌の帛紗は茶道の帛紗の濫觴となつたものであるのぢや。そりや一年一遍の莊嚴な禮式ぢやからナ、扇も使はず汗も拭かずに、式中だけは苦熱を辛抱して居るよ、アハアハ。

漁師が法螺貝を獲る方法を聞くと、濱邊の松の枝に灘か伊丹のいゝ香のする酒樽をぶら下げて置く相な、すると海中の法螺貝奴があゝ旨味さうな酒の匂ひがするな、何處に酒があるのか知らんと、ぞろ〳〵濱邊へ這上つて來て見上げると、高い松の枝に酒樽がぶら下つて居る、酒は飲みたいが貝が重たうて登る事が出來ん、そこで貝の中から拔け出して酒を飲みに松の枝に登る、あゝ蓬萊の仙酒とはこれぢやらうと、徽醺を催した時には、早や漁師が貝を獲つて仕舞うた跡ぢや。これが法螺貝を獲る方法ぢやさうなが、酒と女に家庭や細君を忘るゝ者も亦た、丁度法螺貝と同じ愚の骨頂ぢやテ。

日露戰役の際、旅順の攻取に參加して名譽の戰死を遂げた木下中佐は、誠に武骨一遍な好軍人ぢやつた。建仁寺へ三浦梧樓將軍と一緒に初めて見えた折、書院へ通して茶菓を饗應した處が、大抵のお客は菓子を一個二個摘んで茶を喫む位のものぢやが、中佐は座談盡きてさあ立歸らうとする間際に、奉書の紙へ山盛にした菓子をくる〳〵と包んでそつと袂へ入れた、傍から梧樓將軍がそれを見付けて、

「そんな結構な菓子を澤山持歸つては失禮ぢやらう」

と云はれると、中佐は、

「いや京都では出された菓子をすつかり持歸らぬのが却つて失禮に當るのです」

と皆な紙に包んで持歸られたが、其時納は流石軍人は無邪氣で面白いなと思うたよ。それから心易くなつて、一度遊びに來て呉れとの事で行

つた折にも、中佐は雪隱に這入りながら、窓を覗きつゝ大聲で談話をする、御馳走をするとて夫子自ら茄子や牛蒡や豆腐などを買ひ集めて來たのは好いが、

「さあ失敗た」

との事ぢや、

「何が失敗つたのか」

と問うと、

「餘り御馳走を買ひ過ぎた」

と云ふ、偖てそれを煮てからは箸取らぬ先から

「旨味からう〳〵」

と自慢で、衲は、

「ウム却々不味くないナ」

と云ふより仕樣がなかつた。

廿八、慈視閣の風光

衲の書齋に充てゝある三階を慈視閣と命名してあるが、これは建仁寺八勝の一を取つた名ぢや。ずつと閣前の竹籔が拓けたので餘程眺望が廣濶になつた。遙か西南の方に東寺の塔近く淸水や八坂の塔も手に取るやうで、これから閣名を三塔樓とでも付け替へたら面白からうと思うて居るが、朝夕此閣內に靜坐して東山の翠微に相對して居ると、春の花時分は薄紅の化粧、冬の雪景色は厚白粉を塗つたやうで、何とも云へぬ境涯ぢや。衲が此寺へ來てから最う幾度か東山の花、紅葉を見たので、舊知の情がある。いや東山ばかりぢやない、其處の禪堂の庭の銀杏の樹を見ても、すぐ舊知の感が起る。夏の綠の天地になると、銀杏の葉が疊

疊と生茂るかと思ふと、それが冬枯の寒い風に悉く黄葉して散つて仕舞う。閣内までも其扇形の黄葉が散つて來る。茂つたり散つたり、衲が此寺へ來てから早や殆ど二十年、銀杏の樹は依然として生きて居るヴム閣前に在る靈源院の松の樹か、あれも却々氣持の好い大木ぢやが、なに時々鳶が梢に止つて拔羽を落すが、あんたは其拔羽を拾うてどんな感じが起るかナ、忽ち鷲鳥に化して羽搏つやうな心地にはならぬか。衲もいつも彼の松を獨坐の友として居るが此、

獨有高風消暑友、庭前百尺一蒼龍

と云ふ偈は、衲が彼の松を詠じたのぢや、實に天に朝する一蒼龍ぢや。松と云へば臨濟和尚の松に限る、それは和尚が松を栽ゑる、次に師匠の黄檗が、

「此深山裏に松を栽ゑて什麼するか」

と問うた、すると和尚は、

「一には山門のために境致となし、二には後人のために標榜となさん」

と道ひ了るや、鑊頭を以て打地三下した事を云ふのぢやが、凡そ人間は皆此臨濟栽松の大見識と大抱負がなければ駄目ぢや。此臨濟の栽ゑたのは松樹千年の綠普通の松ぢやない、況むや花の散り易い櫻の花のやうな物ぢやないぞ。さあ世人は誰も彼も一生中に必ず此臨濟栽松を手本として國家の爲に千古不朽の事業、後人の標榜となるべき松を栽ゑねばならぬぢや。

廿九、大根蕪の生命

頃日ノ、北海道の某から妙な事柄を質問して來た、それは、蕪や大根の野菜類にでも生命が惜しいと云ふ心がある、生々繁殖して居たいと思

へばこそ大きくもなる、それを我々人間が菜刀で切つたり漬けたりして喰ふのは慘酷ぢや、これ獸類や魚鳥類を喰ふのと同じく矢張殺生ではないか貴意如何との質問ぢやが、衲は未だ何とも答へて遣らずに居る。あんたなら什麼答へるか、なに蕪や大根は、さあ人間樣、何卒か喰べてお呉れやすと云うて大きくなつて居るのぢやと解釋するのか、アハヽヽ。

そりや山川草木一切佛性がある。鳩にも三枝の禮、鴉にも反哺の孝、鼠も忠と云ふ事を知て居るからナ。蕪や大根にも亦喰はれるとあゝ痛いく位は知つて居るかも解らんテ、アハヽヽ。

建仁寺のだらりの鐘か、あれは昔時山内に火事のあつた時無茶苦茶に亂打したものぢやから、龜裂が這入つて居るさうで、一種奇異な音響を發する鐘ぢや。だらりと云ふと京名物の一になつて、近松門左衛門の淨瑠璃長町女腹切の中の文句にも出て居るさうながだらりとは俗の訛で、陀羅尼の方が正しいのぢや。陀羅尼とは梵語之を譯すると、總持と云ふ事になる。總持とは、此ゴーンの音響の中に、森羅萬象悉く含んで居ると云ふ意味ぢや。

琉球人は坊主の事を指して佛の御大將と云うて居る。衲が未だ壹岐に居た折ぢやつた、琉球の呉服商人が寺へ遣て來て玄關で「アンタ――アンタ――」大聲で呼ぶ、アンター――とは賴まうと云ふ案内の言葉ぢやので、衲が取次に出て呉服は要らんと斷ると、雛僧さんでは解らん佛の御大將に、御眼に懸りたいと云ひよつたが、坊主を佛の御大將とは却々面白い方言ぢやナ。いや雛僧を別に佛の兵隊さんとも云ひよらなかつた、アハヽヽ。

僧堂では毎年八月の十二日、夏末の大接心が了ると、起單留錫と云ふ

事を遣る。起單(單は雲衲の坐具)とは雲衲が單を起つと云ふ意味で、畢竟雲衲中のばら助や不品行の奴等を僧堂から逐ひ出すの謂ぢや。又留錫とは文字通りの留錫で、これは其儘僧堂に留錫しても苦しくない者を指すのぢやが、此日は評席と云ふ雲衲中の役僧が、起單帳と留錫帳の二冊の帳面を前に控へて、閻魔の如き怖い顔付をして居る。而して一々大衆を呼び付けて、

「あんたは起單ぢやらう」

「いゝえ如何仕りまして留錫です」

と云ふ鹽梅に、十分平生の素行の惡い點を指摘して反省せしめる。反省せしめてから漸く留錫帳に記入するのぢやが、迚も駄目なばら助は何と申譯しても搆はずさつさと起單帳に記入して、愚圖々々すれば警策を以て撲き出すのが淸規ぢや。それで一度此起單帳に付けられたが最期、彼奴は起單帳に付けられた奴ぢや」とて、何處の僧堂へ掛錫しても擯斥せられるので、雲衲は昔から此日を頭痛鉢卷で迎へたものぢや。ウム一般の雲衲には評席評席には衲から直接小言を云ふのぢやが、衲には誰も小言を云ふ者がない。只祖師の達磨があの恐しい大きな眼玉を吳れるばかりぢや、アハヽヽ。

雲衲には手にも足にも負へん横着な奴が多い。昔は天下を横行濶歩した者は僧堂の雲衲で、丁度今日の書生と同じく覇氣滿々たる者ばかりぢやつた。未だ東海道の箱根に關所のあつた時分に、こんな横着な事をしよつた雲衲がある。その當時關所を通るには、雲衲は皆冠つて居る網代笠を脱いで會釋して通らねばならぬ掟ぢやつたのに、衲の知つて居る雲衲は、なに衲は笠を着たまゝ通つて見せる、其代りお前達の笠を皆貸せと云つて、同伴の七八人雲衲の網代笠をこと〳〵く取上て仕舞

うた。偖箱根の關所に差懸つて右の雲衲は如何するかと思つて居ると、七八人分の笠を重ねてすつかり自分一人が冠つたまゝ素知らぬ顏で關所を通り越さうとする、すると關所の役人が之を見咎めて、

「笠を取れ」

と云ふと、

「ハイ」

と一番上の笠一枚を脱ぐ、又、

「笠を取れ」

「ハイ」

と七八遍同じくやつて居る間に遂々笠を着たまゝ關所を通り過ぎて仕舞うたとの話ぢやが、昔の雲衲にはこんな調子で、酢でも蒟蒻でも行かん奴が多かつたよ。

其頃名古屋に大會があつた時ぢや、歸り道に近江八景を一覽しやうぢやないかと相談して、衲等七八人の雲衲が春風に吹れ乍ら、ぶらりぶらり摺針峠まで來懸つて峠の茶店で休息した事がある。其折同行の雲衲に一人大の吝嗇漢があるので、一つ彼奴を困らして遣らうか、そりや面白からうと衲が發頭人で、皆々草餅を喰ふは〳〵腹一杯詰め込んで、錢は今小便をして居る人に貰うて呉れと言捨てたまゝ峠を走り下りて、八人分の茶代や草餅代をすつかり小便したり愚圖々々して居た吝嗇漢に支拂はせた事があつたよ。衲も雲衲時代にはいろ〳〵な惡戯を遣つた者ぢや。なに雲衲の旅裝か、あれは丁度今日の兵隊の背嚢のやうに仰山ある荷物を巧みに小さく拵へて、袈裟文庫と共に首の前と後にぶら下げて行くのぢやが、之をぶら下げて居ると却々歩き好いものぢや。

三十、盲滅法のカーツ

衲が未だ雛僧で妙心寺の僧堂に居た時、此京都の市中へ托鉢に出た事がある。今から考へると寺町頭の天寧寺あたりに曹洞宗の寺があつたが、ホーホーと歩いて行く出合頭に、其寺の門内から一人の和尚が出て來て、指の先に一文錢を掴み乍ら、

「如何なるか是れ臨濟の家風」

と問答を仕掛けよつた。衲は未だ其時趙州の無字位より通つて居ぬ雛僧ぢやから大いに弱つたが、なに臨濟の家風なら何日も提唱で聽いて居る喝ぢやらうと、盲滅法に、

「カーツ」

と一喝を遣つた。すると相手の和尚は、

「鴉鳴をなす勿れ」

と一拶を入れよつたが、衲は飽迄これで押通して遣らうと又、

「カーツ」

と遣つた、今度は、

「三喝四喝の後什麼生」

と打込んで來たが、衲は相變らず、

「カーツ」

と遣つて退けると、向うは到頭一文錢をチャリンと鐵鉢の中へ入れて、

「能く護持し去れ」

と門内へ這入つて仕舞うた。昔は折々途中でこんな問答を仕掛けられるので、うつかり托鉢にも出られなんだものぢや。いや斯う云ふ風に油斷の出來ぬ方が好いのぢや。

これも衲の雛僧時分ぢやが、師匠から京都へ行つて新京極の芝居の繪看板などをポカリと口開いて見上げて居ると、掏摸から睾丸を取られるぞと敎へられたので、正直にもそれから繪看板を見る時には必ずしつかりと睾丸を握つて居たものぢやが、今日の人間は却々親や師匠の云ふ事でも正直に受取りよらんので大きくなると酒や女に睾丸を取られる連中ばかりぢや。いや甚しくなると此天にも地にも一つよりない大切な睾丸までを質に置く奴があるよ、アハアハ。

妙心寺の快川和尙は、武田家の殘黨を隱匿たとの事で、織田信長の忌諱に觸れて甲斐の慧林等で燒殺された和尙ぢやが、其燒殺される折の光景は實に凄まじいもので、百餘名の僧徒肅然としていづれも山門の上に登るや、さあ今は免れぬ場合ぢや、平生修練の功を現はすのは此時ぢや、皆々狼狽へずに末期の一句を道へとて、火焔裏に端坐し乍ら和尙の道はれたのが即ち彼の「心頭を滅却すれば火も亦涼し」の一句ぢやが、此事を思へば昨今の炎暑位何でもないナ。もつと暑さが足らん、不二山の雪や北海の氷が熱湯になる程暑くならんと天下の愚物は能く悟りよらんテ。

檀林皇后の和歌に、

唐の山のあなたに立つ雲はこゝに焚く火の煙なるらん

と示ふ幽玄な禪味のあるのがある。又後奈良院も確か妙心寺の大休國師かに參禪した方で、雨風の吹き荒ぶ日、同寺へ駕を枉げられて、

燃ゆる火をわけても法は聽くべきを雨と風とを厭ふべきかは

と云ふ和歌を詠まれたさうぢやが、凡て參禪の學者には此水火を避けぬ熱烈な氣象が入用ぢや。

卅一、尊貴の參禪

支那には、萬乘の尊貴に在る天子が參禪せられたのは幾人もある。先づ達磨と聖諦第一義の問答をした梁武帝、南陽忠國師に參禪せられた唐肅宗皇帝の如きは其最なるものぢや。肅宗は其東宮時代から忠國師に歸依して、一時國難に出逢うて剃髪緇衣を纏うて居られた事もある。

溪禪豈能留得住、直歸大海作波濤

と云ふ偈は其緇衣時代の作で、窃かに禪の上から胸中の鬱勃を洩らされたのぢや、後果して大中天子となられた時、忠國師に、

「百年の後所須何物ぞ」

と問はれた、國師は、

「老僧の爲に無縫塔を作れ」

と云はれると、帝は更に、

「塔樣如何」

と問はれる、國師は稍久しくしてから、

「會麼」

と云はれたが帝遂に不會。乃で國師は我が付法の弟子耽源に塔樣を問へとて遷化せられたので、帝は態々耽源を招して師の塔樣を問はれると、耽源も亦、

「湘の南潭の北云云」

と一句答へた切りぢやとは何と面白い塔ぢやナ。此無縫塔とはどんな塔ぢやらうナ、アハヽハ。

紫野の芋堀坊主を以て自任して居られた、大德寺の菅廣州和尚も遂々遷化せられたが、彼の和尚は備前曹源寺の儀山和尚の法嗣で隱山家

である。師匠の儀山和尚は此間も一寸話した通り枕繪を一見して再見せずと云はれた却々の遣手で近世禪林の傑物ぢやつた。其鉗鎚を受けた和尚の事ぢやから、腹の方は十分錬れて居るに違ひない。ウム餘技としては書と弓が上手で、先づ愚直な一方向きの擔板漢と謂つて宜からう。

其愚直な證據には、先年菩提會の總代として鎌倉へ行かれた時にぢや、和尚は紫法衣を纏ふ管長の身分ぢやのに、殊勝にも昔忘れぬ雲水の姿をして圓覺寺の宗演和尚を訪うた處が、宗演和尚は又五分苅頭に琉球絣の着流しと云ふ當世の書世風をして面會をしたのは好いが、一向大德寺管長としての待遇をせん雲水坊主の取扱ひをしよつたとて歸京後ぷん〳〵怒つて居られたので、衲は、そりや宗演和尚が引掛けたのぢや、あんたが餘り昔風をして行つたので、此通り時勢も知らねばならぬと、態と書生風をして見せたのぢやらうと云つたが、和尚はいや違ふ——と眞赤になつて怒つて居られた。其和尚も今や即ち亡しで何處へ行脚せられたぢやらうナ。行衞は、

ほの〳〵と明石の浦の朝霧に島隱れゆく船をしぞ思ふ

と云ふ人麿の和歌のやうなものぢやテ。

卅二、生也死也馬鹿馬鹿

苟も禪坊主の死際には是非遺偈のありたいものぢや。誰ぢやつたか名は忘れたが、昔時、

生也咄々、死也咄々、畢竟如何、咄々咄咄

と云うて死んだ和尚もあるよ。衲も臨終にはどんな遺偈を作つたものか知らん。

生也馬鹿々々、死也馬鹿々々、畢竟如何、馬鹿々々々々

とは什麼ぢやらうナ、アハヽヽ。

日出新聞の談叢に出て居た、支那の蒙塾で童子に習字せしむる字格語、

一去二三里、煙村四五家、樓臺六七座、八九十枝花

と云ふ詩は、無數の數と云ふ處の禪味があつて却々面白いナ。又同じ數字の作詩で、

一片一片又一片、兩片三片四五片、六七八片九十片、飛入蘆花都不見

と云ふのも、其結句に、大いに禪味があるよ。なに明月藏鷺の趣きとも亦違ふが、衲は此詩を讀んでフト思ひ出した話があるよ。言うて聞さうかナ。

それは一人の托鉢僧が行暮れて或村里の豪家へ投宿を乞うた。折ふし其夜其家に詩會が始まつて居て、村醫村儒の面々は、今や眼までも白黑の平仄にして苦吟の最中ぢや。處が僧も素より嗜な道とて其仲間入りをさして呉れと願ふと、皆々こんな汚い乞食坊主に詩が出來て堪るもんかと、心窃かに輕蔑して居た。すると僧は丁度其座に出してあつた過去帳を擴げて見て居たが、頓て「七日三萬燈明佛」と遣つたので、そりや過去帳の佛名丸出しぢやないかとて、滿座大笑ひになつた。僧は委細構はずに又「一超直入禪定門」と承句を置き、「寛永元年秋九月」と轉句を付けると、皆々此僧を馬鹿にして笑ふ、遂に結句の「樹凋葉落皆歸根」に至つて、初めて凡僧でない事を知り、遽かに上座に据ゑて尊敬したとの話ぢやが、人情は皆こんな輕薄なもので、一向當てにならんものぢや。

卅三、一筆申す火の用心

衲の雛僧の折師匠から詩の起承轉結は賴山陽の、

京都三條帶屋の娘、姉は十八妹は十四、諸國諸大名は刄で殺す、此是娘は眼元で殺す

の歌謠のやうに詠めば好い。又文章の模範は、

金三兩、返すか返さぬかこれ如何ぢや、返すと云へばそれで宜し、返さぬならば己れが行く、行くについては只おかぬ、龜の甲には骨がある」

と云ふ、龜と呼ぶ男の貸金催促狀、書翰の手本には德川家康の家來で鬼作左と呼ばれた本多作左衛門が陣中から妻の許に寄越した、

一筆申す火の用心、おせん泣すな馬肥せ

と云ふのに及ぶものがないと敎へられたが、坐禪をするのも亦斯う云ふ風に、簡にして要を得た粉飾のない所が入用ぢや。坐禪は心の素地を磨く修業に外ならぬのぢや。此眼元で殺す帶屋の娘、龜の甲には骨がある、一筆申す火の用心には、佛祖も窺へぬ所がある。

京都でも百姓が毎朝早く「小便しよ」と大小便を壬生菜や蕪大根と代へに來るが、九州地方でも大便を糯米と代へる習慣がある。それで衲の雲水時分に此九州で大便の僞造をしよつた奴があつた。それは赤土を捏ねて竹の筒の中へ入れ、ニユーと突き出すと如何にも人間の糞らしくなる、而して百姓を欺して糯米を取りよつたのぢやが、書畫や紙幣の贋物を拵へる者はあるが、糞の僞造とは古今只一人ぢやらうとの當時の評判ぢやつた。いや番茶に鹽を入れて小便の僞造をした者は未だ聞かんよ、アハヽヽ。

學者が一寸位坐禪をしても、丁度衆盲が大象を評するやうなもので、或者は鼻を撫でゝ坐禪とは長い物ぢや、或者は牙に觸れて坐禪とは堅い物ぢやと勘違ひして居るから可笑しい。皆これ大象の本體を得たの

でなく、ほんの一部分を見たか見ぬぢや。苟も坐禪を遣つた以上はせめて箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川と云ふ難透難解を踏破した後にならぬと、眞個の禪味は會せぬとしたものぢや。初學の內の順風に帆を立てる合頭の禪は易いが、陸地に舟を行る逆境の禪になると、實に容易の業ではない、恰で石に嚙り付くやうなものぢやぞ。

僧堂では寢忘れと云うて、時々朝寢をする事はあるが、それでも東山一帶に紫の横雲が棚曳いて、少し茜の射し初むる頃には皆々起床する。午前六時頃には早や竹箒を持つたり淨巾を使うて清掃を始めて居る。寢忘れと云うてもつまり在家の早起と同じ事ぢやが、衲の經驗に依ると、朝寢を起すのには蒲團をひん捲るのが一番早いよ。蒲團をひん捲られると、どんな狸寢をして居る横着な奴でも、不行儀な寢相を見られまじと、狼狽てゝ飛んで起きるものぢや。中京邊では、番頭丁稚に朝顏の世話をさせて早起を勸めて居るさうぢやが、僧堂ではそんな風流な優しい事はせん、默つて蒲團をひん捲るばかりぢや。

人間の死ぬのは恰で殼穿ち雀飛ぶやうなものと云うてある。なに其雀の行衛か、それは碧巖にも出て居る通り、馬祖と百丈が山雲海月の情を話しつゝ野道を行つた處が、池の汀に數羽の鴨か下りて居る。鴨は二人の跫音に驚いてバタ〳〵と飛び去るのを百丈があゝ鴨が飛んだと云ふと、馬祖はいきなり百丈の鼻頭を捻つた。百丈はあゝ痛いと忍痛の聲を發すと、馬祖はそれ見よ鴨は何處へも飛び去つて居ぬではないかと云うたのと一般、雀の行衛も亦此鴨の行衛と同じ處ぢやが、偖此雀のお宿はどこに在るのか解るかナ。

卅四、何をくよ〳〵川端柳

何をくよ〳〵川端柳水の流れを見て暮せ

で、人間は此水の流を見て暮してさへ居れば、不平も煩悶も起るものぢやないよ。水は暑いとも寒いとも憎いとも可愛とも、長いとも短いとも、圓いとも四角いとも、何とも思はずに日夜滔々として流れて居る。趙州が所謂急水上に毬子を打すで、岩に逢うて激するのも無心、淵に入つて默するのも無心、行くとして停滯する處なしぢや。「隨流識得性、無喜亦無憂」で、衲は最も水を愛するよ。

昔時弓の稽古をした人がある、それは虱を的にして彼のゝと黑い處へ射當てやうと試みたのぢやが、最初の内は却々小さいので、目に這入らう筈がない。それが段々修練の功を積むに從うて遂には虱の的が天地一ぱいの大きさに見えて、天晴弓術の名人となつたとの話がある。坐禪の工夫も亦此虱の的を射落すやうなもので、古則公案が即ち虱の的である。

衲は昨日の朝清水山へ上つて來たが、既に秋色七分ぢやつた。市中の景色は何時見ても却々好いナ。清水山から瞰下して衲のふと感じたのは、彼の八坂の塔の周圍に紙を張つて、一大走馬燈を拵へたら、盂蘭盆の送火としては大文字なぞよりも面白いと思うたよ。塔を中心にしての大走馬燈を作るのぢやが、其繪は天龍寺の丸龍を描いた松年翁に賴めば好いし、此走馬燈は京の市中一面を照して、確かに京名物の一つになるに違ひない。

卅五、雷雪潭と寶洲

美濃井深の雪潭和尚と云ふのは、東福寺の故敬冲和尚等の師匠に當る人で、雷雪潭と呼ばれた程の機鋒峻烈な歴々ぢやつたが、其體は丁度

十夜の蛸のやうに極小さい方で、講座の際彼の厚い座蒲團を二三枚も敷重ねても、未だ見臺の上へ首が屆かぬ位のチンコぢやつたさうなが、或時自身の法衣を美濃から京都の法衣屋へ注文した處が、僅かに二尺の丈なので、法衣屋ではこりやお雛僧の着用ぢやらうと氣轉を利かした末、襟や袖口に赤い緣の取つた可愛らしい沙彌法衣を仕立てゝ送ると、和尚は之を見るや其綽名の雷のやうに怒鳴つたとの事ぢや。大人で二尺の法衣とは、今の東福寺の和尚よりも最とチンコぢやつたと見えるナ。

それに偶然とは云ひながら、當時同國美濃の虎溪には寶洲和尚と云ふ馬鹿に體の大きい人があつて、此和尚と一緒に歩くと雪潭和尚はいよ〳〵小さく見えて貫目がない。處が負けん氣の雪潭和尚ぢやから、柄が寶洲和尚を拔いて妙心寺の紫階即ち大和尚の稱號を取つて遣らうと其手續をした。隣山ぢやから早くも之を聞知つた寶洲和尚も亦、あんな小さい和尚に大和尚の稱號を先んぜられてはならぬと、是又紫階を受ける手續をする。こゝに井深と虎溪の競爭になつて、遂に雪潭和尚が機先を制した丈け、寶洲和尚よりも早く紫階の大和尚の格式を得たので、最う詮樣がない。大會や楞嚴行道などに兩和尚の落合ふ時は、必ず雪潭が紫法衣を纏うて一番に威張つて行く。其尻に寶洲和尚が付かねばならんので、寶洲和尚も如何かして一つ雷雪潭を弱らして遣らうと考へた末、楞嚴行道の時になると、背後から雪潭和尚の顏をバァと覗く事にしたので、これには流石の雪潭和尚も閉口したとの話ぢやが、此兩和尚の小兒見たやうな無邪氣な爭ひが面白いぢやないか。

其緣先のは小萩の盆栽ぢやが、それを睨と眺めて居ると、高臺寺や大極殿の秋色も這裡に在る。ウム其盆石か、自然に不二山になつて太奇ぢ

やらう。別に草鞋掛けで不二登山をせずともぢや、其小さい一個の盆石に妙高二千丈の不二山の趣致があるのを看取せねばならん。不二山と云へばこんな古人の詩がある、

朝發芙蓉下、夕宿芙蓉下、宿宿二三宿、未離芙蓉下

これは東海道の道中を幾里行つても〳〵今日も見え今日も見えけり不二の山で、不二山の下を離れて居らぬ、即ちいくら坐禪の修業をしても、亦自己の心性を離れぬと云ふ處を詠んだものぢやが、仙崖和尚にも、

行脚地は關所通れば又關所五十三次馬の屁の數

と云うのがある。關所とは古則公案の事、それを透破したのが馬の屁の數ぢやが、此馬の屁をひつた時の心地こそ實に春風拂面の境涯ぢやテ、

床の軸は白隱禪師の自畫賛ぢや。茄子三つと、刀のやうに描いてあるのが十六大角豆、上からぶら下つて居るのが夜市の堤灯で、それに、

那須の與市十六歳の曠戰

とは面白いナ。昔時の偉い禪僧は大抵こんな餘技があつた。殊に近世の禪僧で、文才彬彬たるのは矢張仙崖和尚の右に出る者は無からう。衲は同和尚の畫賛を隨分澤山に見たが、其中今でも忘れずに記憶して居るのは、菊の花の繪に、

聽くと雖も而かも耳、なし、齒有れども而も食へず
又蜆子と云うて支那の會昌の沙汰に逢うて川蝦を漁つて居た高僧の繪に、

和尚殺生禁斷
又竹の繪に、
窓前に竹を植うれば夏日蚊多し

と云ふやうな畫賛があつたが、迚もこれは凡骨の企及出來ん畫賛ぢや。

禪機文才二つ乍ら揃はねば、斯う云ふ風に咳唾珠を成さんものぢやテ。

卅六、南天棒と一指頭

此頃攝州西宮に留錫して居る南天棒和尚は、大用現前とも云ふべき元氣な和尚で、常に山岡鐵舟居士か、道得南天棒道不得南天棒と書いたのを彫付けた、太い〳〵南天棒の杜杖を引提げて濶歩して居た和尚ぢやつたが、先年建仁寺へ見えた時、衲が酒前茶後の話の序に、

「あんたは何時までそんな南天棒を持つて居るのか、老體の邪魔にはなりはせんか、鐵舟居士のやうな劒客でも晩年には無刀流と云ふ流儀を始めて無刀の尊さを知つて居たのに、あんたは未だ南天棒がそんなに大事なのか」

と云うたら、和尚は暗々裡に此言葉を用ゐたものと見えて、それからは斷然南天棒を持歩かぬやうになつた。其代り墨蹟を賴まれても南天棒、扇面に書畫を乞はれても南天棒の一天張で、此間も此寺へ來て、

「衲が死んだら何卒引導を渡して吳れ、偈語には是非南天棒の三字を忘れずに入れて置いて吳れ」

と賴んで行つたが、此南天棒も亦天龍一指頭の禪の如しぢや。

此南天棒和尚は、其雲衲時代に餘程骨を折つた人である。いつも當時の經驗を笑話にして居るが、それは僧堂に坐つて居て、チラ〳〵と眼先に浮世繪のやうな美人の紅い裾や白い脛の優姿が見え出すと、なに糞ッ——と龍躍虎嘯のチンポを押へ付け乍ら、達磨何人ぞ我何人ぞ、こんな妄念が尻の下へ坐斷出來ぬやうで、此大修業が成し得らるものかと、一生懸命に公案を拈提したとの事ぢやが、此克己心此元氣あつて、初めて他日天下の南天棒と謳はるゝに至つたのぢや。今日の青年も亦之を

手本として、向上の一路に勇猛精進せねばならぬぞ。

坐禪も一度は身心脫落するまで刻苦せねば駄目ぢや。身心脫落して後は脫落心身となつての所謂、

到得歸來無別事、　盧山烟雨浙江潮

の境涯を得られるのぢや。

何處無山秀、　何邊無水流、　借問東西客、　此山水在不

の別天地に入る事が出來るのぢやが、これは迚もトロイ坐禪の仕樣では駄目ぢやテ。

白隱禪師の號か、それは白拈賊。いや畫の白畫にでも隱れて居る、兎の毛も他人に斯心を窺はさぬと云ふ處から付けられた號ぢや。隱の字で想ひ出したが、同禪師の和歌にこんなのがあるよ。

隱遁の遁を昔に書きかへて昔は遁る今は貪る

遁と貪の同音の諷刺ぢや。

卅七、天狗の隱れ簑

天狗が隱れ蓑と隱れ笠を着て木の梢に腰掛けて居ると、豆腐買ひに行く童子が笊を冠つて、やあ鼻の高い天狗さんやと云うと、天狗は驚いて、乃公が此隱れ蓑隱れ笠を着て居るのに見付けるとは何者ぢやらう、はゝあ彼奴は顏中眼玉だらけぢやナ、それで乃公の此姿が見えたのぢやらうと、笊の編目を眼玉と思つて「お前の持つて居る眼玉と乃公の隱れ蓑隱れ笠と交換して呉れんか」と、遂々笊と隱れ蓑隱れ笠と交換した。

軈て童子は豆腐買うて來て裏口へ一寸蓑笠を脫いで置いた間に、家の者がこんな汚い蓑笠があると、竈の下で焚いて仕舞うたので、童子は其竈の灰を身體一面に塗り付けると、不思議や聲ばかり聞えて童子の姿

が見えぬ。家人は什麼した事ぢやらうと驚いて居ると、其處にある羊羹が無くなる、饅頭が無くなる、其内に童子はあゝ甘いナと指の先を舐つたので、舐つた處だけ灰が剝げた。さあ家内中は指の怪物が出來たと大騒ぎした上、倶胝の一指ぢやないが、其指の怪物を斬つて退治て仕舞うた。童子はあつ痛いと泣いたので、此度は顔の灰が涙で剝げて顔ばかり見え出したとの話があるが、白隱とは即ち此隱れ蓑隱れ笠を着て居るを云ふのぢや。一念起ればすぐ天狗の鼻までも見付けられるのぢや。

衲が建仁寺の管長に擬せられた時、何遍も逃げ出さうとした事がある。一度江州へ逃げようと思つて相國寺の獨園和尚の許へそれとはなしに暇乞に行つた處が、和尚は早くも之を看破して、

「江州へ何しに行くのぢや」

「はい一寸養生に參ります」

「ウム江州に限らん、養生は禪坊主一生の仕事ぢやないか」

と聖胎長養と云ふ處を諭されたので、衲も此一言には砭を刺されたやうに感じて忝々しく禮拜して退いた。和尚はいつも斯う云ふ風に下から出る人で、先づ九天の上へ揚げて九地の下へ落さうと云ふ手段に出た人ぢやつた。之に反して東福寺の敬冲和尚はすぐ頭から嚙付ける人で、獨園和尚遷化の折ぢやつたか、敬冲和尚も出て來て居られたので、衲はお愛想の積りで、

「追々老宿が亡くなられるが、和尚も自愛して下さい」

と云つた處が、和尚は、

「なんぢや禪坊主が死んで堪るかい」

と一口に嚙付けた。衲も癇癪にさはつたからナ、

「なに直にくたばるぞ」

と云うて呉れた事があるが、どちらも牡丹芍藥で面白い機鋒ぢや。併し衲は獨園和尚の一言は深く味ふ處があるが、敬冲和尚の一喝は屁とも思はなんだよ、アハアハ。

妙心寺の開山關山國師に、或檀家の者が男の子を擧げて何か一句祝うて呉れと賴むだ處が、國師は「牛の犟丸〳〵」と云はれたさうなが面白いな。牛の犟丸はぶらり〳〵と落ちさうで落ちん、大丈夫な物ぢや。人間の世渡りも斯う云ふ風に遣らねば出世せんぞと云ふ處を敎へられたのぢやが、成程牛の犟丸は却々禪味がある物ぢやナ、アハヽヽ。

白隱禪師の歌で、

樂みはうしろに柱まへに酒となり座敷に摺鉢の音

と云ふ和歌がある。此摺鉢のことつく音は今しも上戸の好きな胡瓜の酢揉みでも拵へて居る處ぢやらうが、何となう心樂しい人情を盡した歌ぢやナ。衲ならうしろに柱まへに茶菓と云はねばならぬ處ぢや、アハ。いや茶菓と云へば何日ぞや龜屋良則が出て來て、栗羊羹と粽に名を付けて呉れよとの事ぢやつたので、衲は羊羹には丹山鳳髓、粽には玄黃と名を付けて遣つた處が、恰で戒名のやうな名ぢやから一向賣れなんだと、其後此室へ來て不足を云うて居たよ、アハヽヽ。

卅八、白隱禪師の繪畫

白隱禪師は、繪は疎畫に限らず、念の入つた密畫でも上手に描かれた。其證據には、衲の所藏に髑髏の坐禪して居る圖がある。これは謹んで描いてあるよ。前にも話した通り、

日本に過ぎたる物が二つあり駿河の不二に原の白隱

と云ふ同禪師の和歌があるが、衲も此間他から不二山の畫賛を賴まれ

たので之を眞似して、

日本に過ぎたる物が二つあり駿河の不二に京の默雷

と遣つたが什麼ぢや。これは不二越しの龍ではない、不二越しの雷公ぢや、一寸面白からう、アハヽヽ。

白隱禪師が、已墜の禪風を振起するまでの坐禪の遣方は殆んど死んで居た。學者は柏樹子なら柏樹子、無字なら無字の公案に對する見所を一々紙箋に書いて師家に見せに廻つたもので、白雪萬里――遠矢を射るやうな遲臭い遣方ぢやつた。なぜ衲が之を知つて居るかと云ふに、此見所を書いた紙箋が今でも紫野大德寺の唐櫃に殘つて居る。此唐櫃を開けると瞎になると言傳へて居るが、衲は雛僧の椀白盛りに窃と開けて見て置いたので知つて居るのぢや。

禪の五家七宗には皆それ〳〵の家風があるが、我が臨濟宗は六十棒の頭から生れて出たので、所詮棒喝が家風ぢや。併し棒喝と云うても無暗に打撲つたり怒鳴たりするばかりが棒喝ぢやないぞ。臨濟の四喝と稱して、或時の一喝は金剛王の寶劍の如く、或時の一喝は踞地金毛の獅子の如く、或時の一喝は探竿影草の如く、或時の一喝は一喝の用を作さずとある如く、此一喝の用を作さずと云ふ處が最も平生に肝心な處ぢや。要するに棒喝は奥の手、正宗の刀は滅多に拔かぬものぢや。根氣の薄い今日の人間に對しては、恁は棒喝よりも唇皮を以て相手になつて居るのぢや。

富岡鐵齋翁は、流石に後素界の泰斗と仰がれた丈けに、造次にも顚沛にも畫三昧に入つて居たらしい。確か數年前建仁寺の布薩式の折ぢゃつたか、翁も參詣して居たが、式後衲等の茶を飲んで居る前へ遣つて來て、默雷さん、私は此間から九州を繪行脚して歸りましたが、博多聖福寺

の仙崖和尚の畫を見て感心しました、こんな面白い畫がありました」と
すぐ腰の墨斗を取出して衲の未だ一口も飲まぬ高坯の茶を亂暴にも
筆洗にして、すら〳〵と描いて見せた事があるが、こゝが無邪氣で面白
い。畫筆を取ると直ちに三昧に入る、眼中人を空うする獅子王の威が現
はれる。成程一藝に達して居るだけに凡骨ぢやないなと感心した事が
あるよ。

京都にも畫家が蛙子ほど澤山居るが、「繪に描いた梅は香もよし色も
よし」と云ふ此色香を描き切るほどの畫家は幾人あるぢやらうナ。

卅九、鯖の頭の鑑定

こんな面白い話がある。或魚を見た事のない山間の僻村へ、鯖の頭を
持て行た者があつた。すると村人はこれは何ぢやらう・さあ何ぢやらう
と、村中の問題になつて、遂々檀那寺の和尚の智慧を借りに行くと、和尚
は一見して、ハヽアこれは鰐口(佛器)ぢやと鑑定する。次に鎮守の神主に
見せると、いやこれは蛭子樣の刀の柄袋(鯛を蛭子樣の刀の柄袋と思つ
て居るからぢや)と判斷したとの笑草があるが、坐禪にも近頃相似の禪
と云ふ奴が多くて困つたものぢやテ、

猫が何故ニャンと鳴く、鼠が何故チユウと鳴く、雨は何處から降る、風
は何處から吹く、なぜ生薑は辛い、なぜ砂糖は甘い、なぜ痛い、なぜ痒いと
云ふやうな試驗問題は、今日の大學にも無いぢやらうか、こんな試驗問
題を出して一つ天下の人心を驚かしたら嘸かし面白からうと思はれ
るナ、アハヽヽ。

祖師達磨が斷臂の慧可に對つて「與レ汝安心竟」と云つたのは、これ慧
可に心印を與へたので、坐禪の心印は滴々相傳、祖師以來今日に至るも

尙盡きぬのである。それで禪家でも最も其系統と禪風を尊重する、後世祖師の衣鉢を傳へ、如意柱杖を與へ、印可證明をするやうになつたのは、世の相似の禪と甄別する爲め、つまり其系統を尊重する所以ぢや。一穗の毒焰を萬世の下に吹滅させぬ用心ぢや。

世の相似の禪を遣る奴は、其門內をも窺はずに、濫りに白隱禪師の禪風は無理である不自然であると誹謗するが、眉鬚の墮落せぬのが不思議ぢや。彼等は理智一枚に偏して、「柱裏に入れ」とか「天の星を數へよ」とかの、公案になると、いや人間業でそんな事が出來るものか、手品輕業ぢやと一言に貶して居るが、決して無理でも不自然でもない、茶釜から不二山を出す事も、千里向うの燈火をも吹き消す事が出來る。此修業ほど合理自然なものはない。併しこれは是等の古則公案を踏破した獅子兒にして初めて妙味を知る事を得るのぢや。

坐禪を譬へると、丁度蛇が竹筒へ入れられたやうなもので、公案は竹筒、學者は蛇ぢや。曲つては到底出られぬ嫌でも眞直に這出さねばならぬ、即ち正念を持續さする修業であるのぢやが、これに無理不自然があつて堪るものか。一つ竹筒を出ると又竹筒がある、斯くて大解脫をした處が即ち歸家穩坐で、其時は曲つても歪んでも中道を失はず、堯天蕩々たるものとなるに至るのぢやぞ。

それに此修業もせずに徒らに難解の碧巖を讀んだり、無門關を讀んだり、自分免許の文字坐禪のみをして居ては、若し邪道へ踏み込んで居ても到底自ら其邪道たるを知る事が出來ぬ。それで晨參暮參入室をしてこれを、滴々法脈を傳へて居る師家の鉗鎚を受けて正して貰はねばならぬ必要が起るのぢや。隨つて祖師關を透破するの必要があるのぢやテ。

師家の一言一句は悉くこれ塗毒鼓、鴆鳥尾ぢや。決して聽捨てにしてはならぬ。或時は抑下の卓上を瞎漢と貶して褒める場合がある。或時は卓上の抑下でえらい者ぢやと褒めて貶する場合がある。それで師家と相見する時は戰陣を張る積りで餘程禪をしつかり締て居らぬと知らぬ間に睾丸を奪られて仕舞うのぢや、アハヽヽ。

四十、娘島田は寢てとける

彼の白隱禪師の不二山の畫賛は、

「不二の白雪や朝日で解ける

と上の句だけを書いて、故意と下の句を現はさぬのに妙處があるテ。

「不二の白雪や朝日で解ける」までは釋迦牟尼が四十九年の說法を指すので、ここまでは誰でも解るが、下の句の、

「娘島田は寢て解ける」

に至つては、これ拈華微笑の敎外別傳で坐禪の妙處ぢや。斯う「娘島田は寢て解ける」と云ふと、天下の人間はすぐ娘島田に執着するぢやらうが、此娘島田は普通の娘島田と違ふのぢや。

昨夜此慈視閣から東山を上る明月を見たが、何とも云はれぬいゝ景色ぢやつた。明月で想ひ出したが、昔卓首座と云ふのは頗る機智のあつた和尙で、詩人墨客と倶に月の夜舟遊をして、さあ詩作をしやうと分韻をした時、卓首座には六ヶ敷亦の韻が當つた、處が首座は醉倒して鼾雷の如く、皆がこれは能う作られまいと思つて居た時に、首座は起き直つて、

嘯暗洞庭赤壁昔、吟懷須磨明石夕、年々三五一輪秋、詩賦新成今宵亦

と遣つたとの事で、一座何れも其機智に驚いたとの話ぢやつまり鼾雷

の如く寢て居ても、少しも油斷せぬ處が感心なのぢや。

これは衲が未だ筑後の梅林の僧堂に掛錫して居た時に聞いた事實あつた話ぢやが、久留米の町に草川一二三と呼ぶ元神主を勤めた人があつた。或日其家の下女が髪をおどろに振亂し眞青な顏付をして、

「旦那さん山葵おろしが眼を刮きました」

と凄い〳〵事を云ふ、主人は、

「なに山葵おろしが目を刮いた、そりや山葵おろしには目があるからナ」

と別に不思議がらぬので其日は濟んだ。すると又次の日下女がキャッ〳〵と逃げ廻りながら、

「旦那さん鍋が歩いて來ます」

と怖がる、主人は、

「そりや其筈ぢや、鍋には三本も足があるからナ」

と矢張氣にも留めぬので、妖魔の窺ふ隙がない。すると又次の日今度は、

「旦那さん火鉢に大きな松蕈が生えました」

と云ふ、こゝで、

「そりや燒松蕈の幽靈ぢやらう」

とでも云へば好かつたのに、主人はぐつと此燒松蕈の返答に行詰つたのと、餘り度々の事に遂々其日から神經を病み出して寢付いたとの話があるが、元來正法には不思議無しで、正念相續の大切な事は此怪談の主人と下女の問答によつても解る。つまり最初は主人が正念で勝つて居たが、正念を失うてからは下女に負けたので、一念起れば飽迄も初一念を貫くのが肝心ぢや。二念三念に移つてはこれ最う心が百鬼夜行の化物屋敷になつて仕舞うて居るのぢや。

いや一念を起しても惡い、一念を起してもすぐ他人から窺はれるとしたものぢや。彼の洞山和尙を土地神が一見したいと付纏うて居た時、いつも庵前庵後にバサ〳〵と落葉を踏む音ばかりはするが、一向姿が見えぬ。處が或日厨の前に米粒が飜れて居る、それを洞山和尙が見付けて、一粒の米も重き事須彌山、誰がこんな不陰德をしたのかと、チラリと一念を起した刹那土地神が、

「やあ洞山和尙とはあんな男か」

と一見して便ち禮拜したとの事ぢやが、洞山和尙のやうな古德でも、一念を起すとすぐ土地神から窺はれたので、學者は以て正念相續の大切な事を知るべしぢや。

一粒の米も重き事須彌山ぢやが、此洞山和尙の處で、雪峰和尙が飯頭となつて居た時ぢや。頻りに米を磨いで居るのを、偶々洞山和尙が見付けて、

「砂を淘つて米を去るか、米を淘つて砂を去るか」

と問うた。すると雪峰は言下に、

「砂米一齊に去る」

と米をぶつちや返して仕舞ふ。

「米を拋つて大衆は什麼を喫ふのか」

と洞山が一喝すると、雪峰は盆をひつくりかへした事が碧巖に出て居るが、昔の坊主は却々思切つた事を遣るものぢやナ。

四十一、長は長短は短

翠微禪師に僧が祖師西來の意を問ふと、禪師は竹林の中へ連れて這入つて、

「此竹は長い、此竹は短い」

と指されたので、其僧は豁然と大悟した。又深山の古德に同じく僧が祖師意を問うた時に、古德は、

「此石は大、此石は小」

と云はれた一言で、其僧も悟つたさうぢやが、長は長、短は短、大は大、小は小で、どんな事を悟つたのぢやらうナ、アハヽヽ。ウム床の畫軸か、それは竹の繪に「香嚴於是敗闕」と賛がしてあるのぢや、香嚴の擊竹も此敗闕と云ふ處を知らねばならぬよ。

鳥尾得庵居士はいつも碧巖集や無門關を讀んで、これも解つて居る、あれも解つて居ると、其古則公案の頌語に、

「鬼も十八蛇も二十」とか「櫺木で腹切る血の涙」とか云ふ、いろは譬へを置いて居られたが、いろは譬への坐禪とは面白いナ、アハヽヽ。

苟も坐禪を遣る學者は、先づ赤兒に生れ變つて來ねば駄目ぢや。學問を鼻に掛けて居るやうでは迚も駄目ぢや。それで衲は、此間から參禪して居る末廣博士にも、一切書物などを讀むなと云うて呉れたら、博士は正直に赤兒になつて出て來て居るよ。

織田有樂齋の弟に、東山道八と云ふのがあつた。これは一寸坐禪の出來た人で、今の圓山左阿彌の處に草廬を結んで居たさうぢや。此東山道八が顏輝の達磨の繪に「昔は達磨今は道八」と賛をした軸物が、今でも塔頭の正傳院の什寶として殘つて居るが、昔は達磨今は道八とは却々凡骨の道へぬ素破らしい一句で、達磨を尻に敷いた獅子吼ぢや。いや此道八は、五條阪の陶器師高橋道八の先祖でも何でもないよ。

大分冬めいて、そろ〳〵爐を開かねばならんやうになつたナ。なに、飄々と落葉となれば面白し

と云ふ發句を詠んだのか、落葉と云へば日蓮上人が龍の口で斬罪に處せられんとせられたのが、丁度十月の十三日、落葉片々たる時節ぢやつたので、其落葉が他人の眼には恰も金波羅華のちらつく如く、不淨役人の持つて居る突棒刺股までが、紅白の蓮華の咲き匂ふやうに見えたさうぢやが、併し坐禪の上からは、すぐ今でも此一枚の落葉が、七寶莊嚴赫灼たるものに見えるが什麼ぢや。

昔時から京都は京師と呼ばれて、何事も全國の師表と仰れて居たもので、京都人と云へば、田舍では大持に持てたものぢやが、併し九州地方では、京言葉には可ではない、京男でも持てたものぢやいや京女ばかり笑しい訛があるとて、こんな流行歌があつたよ。それは、

大根と刎ぬべき者を刎ねもせずいらぬ午勞に茶袋哉

と云ふのぢやが、成程京都人はだいこんをだいこと呼び、ごばうをごんぼう、ちやぶくろをちやんぶくろと訛つて居るからナ、アハヽヽ。

衲は禪を眞言ぢやと思うて居る。其言ふ事には幽玄微妙測るべからざる醍醐味があるからぢや。或則に、月と鼈ほどの違ひではない花と櫻程の違ひ、大釜と禿毫ほどの違ひぢやなど言ふ事があるが、さあ此言ふ事がぢや、實に一種の眞言と謂ても好いのぢやテ。

坊主が戒名を付けるのは、詩や歌を作るよりも六ヶ敷ものぢやテ。衲の知つて居る或無學文盲の和尙があつた。それが死人に戒名を付けて呉れよと乞はれた時、卽座においそれと戒名が考へ出せん、處が其檀家に折好く大豆三斗と書いた札があつたので、こりや好い物を見付けたと、早速大豆三斗を逆さに讀まして、豆大斗三居士」と遣つて退けたと云ふ笑話がある。又これも九州で一廉學問のある和尙が「以外玄心居士」と骨を折つて戒名を付けた處が、其檀家の者等はこれを讀んで、以外に心

の玄い居士とは怪しからん戒名ぢや、死んだ佛は決してそんな惡人ではありませんと大いに怒つたので、其和尙もそんなら更に「以外傳心居士」と付け代へたと云ふ滑稽譚もあるよ。

四十二、萬疊青山隱古鏡

我が心ほど不可思議なものはないナ。歌人は坐らにして名所を知ると云ふが、天の橋立も奥の松島も皆此心の裡にあるのぢや。

三五夜中新月色、二千里外古人情

とは却々いゝ詩ぢやが、此月や此古人は何處から出て來るのぢやらうナ。了賦禪師は「萬疊青山隱古鏡」と云うて居られるが、此古鏡には青山ばかりではない、宇宙の森羅萬象が隱れて居るのぢや。衲の今夏杜鵑を詠じた詩にも、

縱令禪心無所着、卒然惹得古人情

と云ふのがあるよ。卽ち釋迦も達磨も文殊普賢も、こと〳〵く此鏡裏に隱れて居るので、オイと喚べばハイと出て來るのぢや。

當地の中井三郎兵衛の別莊守に面白い老爺が居る。大の本願寺凝りで、是迄妙心寺の寺僕をして居つたのぢやが、本願寺へ參詣するのに不便ぢやとて暇を取つてから、此別莊の掃除番に雇はれたのぢやが、本願寺へ參詣する日には、どんな用事があつても振顧りもせず、塵取も箒も其處へ抛つて置いたまゝ、さつさと出て行く。主人の三郎兵衛がお前の齡は幾才かと問うと、白髮でありながら、

「はい四十五までどす」

名はと聞くと、

「妙心寺では御爺さん、國では皆が長さん〳〵と呼で居やはりました」

と答へたさうぢやが面白いナ、今日にもこんな。堯舜以上の逸民がある
かと思ふと、實に太平蕩々たるものぢや。
　我が臨濟宗では、昔時は餘り讀經念佛などはせなんだものぢや。今日
の如く讀經念佛をするやうになつたのは、彼の元寇襲來の時代から始
まつた事で、つまり敵國降伏怨敵退散の祈禱を所謂擧國一致で遣つた
のが、其まゝ讀經念佛の風を馴致したのである。禪坊主たる者は元來讀
經念佛などの弱音は吐かん、只坐禪一卷になつてさへ居れば、それで法
燈赫灼一切藏經悉く這裏に在りとしたものぢや。
　東福寺の開山聖一國師は、目は眇でも却々の大德であつたが、其遷化
になつた際の事ぢや。同寺の門前にお薩婆のやうな一人の婆子が住ん
で居て、國師の遷化につき僧堂で鉦を鳴らし讀經念佛を始め出したの
をふと聞き咎めて、

「はあ聖一さんも死なれたさうな、鉦がガーン、お經がアヂヤボヂヤカ
　ポチヤと聞え出しては、最う東福寺も駄目ぢや」
と云つたさうなが、煙を見て火なる事を知り、角を見て牛なる事を知る。
カーンの鉦の音で、早くも僧堂の坐禪に惰氣の生じたのを勘破した、此
婆子の一言は實に恐しいテ。なに婆子の名前か、名前は只門前の婆子と
あるだけで解らぬが、多分勸學寮の雀論語を囀るで、永年東福寺の門前
に住んで居たため、自然國師と顏馴染になつたりして、屹度、坐禪も下手
な雲水よりは出來て居た婆子には違ひ無からう。
　白隱下の狂僧として八釜しい、筑後の長堂和尙と云ふのがあつた。此
和尙は、平生何十匹となく近所の野良猫を集めて、來て、其猫に坐禪をさ
せて居た和尙ぢやつた。處が猫は生きて居る、人間の言葉は通ぜぬ、いく
ら坐禪をさせやうと思うてもすぐ動き出す、ニヤンと鳴き出す、御師家

を以て任じて居る和尚の自由にならぬ、これでは或らんと警策を廻して、さあ骨を折れ〳〵と云うても、猫は相變らずニャン〳〵と騒ぐばかりなので、和尚は僧堂の清規ぢやとて、びしり〳〵と猫に痛棒を喰はす、遂に何十匹と云ふ猫を悉く撲殺したとの事ぢやが、縱令狂僧になつても、坐禪の事だけは忘れぬのが哀れぢや。衲なら生きて居る猫などよりも、拂子とか如意とかの愛玩品をずらりと並べて眺めて置く、若し酒色を好む和尚なら、禪利禪士盃居士、お酌大姉などを坐禪させて置くぢやらう、アハヽヽ。

四十三、闇齋と景樹の禪

今度位階追贈の光榮に浴した山崎闇齋先生は、元妙心寺の雛僧であつたのぢやが、其後儒學に志して坊主を廢める時、こんな木佛が何の用に立つものんかと、本尊に弓を射放して妙心寺を逐電したが、これ蛇は寸にして人を呑む概があるのぢや。彼の歌人の香川景樹翁が參禪辨道したと云ふ鎌倉の誠拙禪師が、未だ雲水坊主で行脚に出懸けられる折、鶴ヶ岡八幡宮へ詣でゝどうか此大修業が成就出來ましたら曉にはお禮として碧巖錄の提唱をお聽せ申しますとの誓願を立てゝ出立したさうなが、後來其修業が出來上つた時、約束の如く八幡さんに碧巖錄の提唱をして聽したと云ふ話があるが、神佛へ參詣してもこんな誓願を立てゝこそ神佛も喜ばれるのぢや。

此誠拙禪師は、却々和歌が上手ぢやつたが、これは香川景樹翁に就て學ばれたからぢやらう。なに景樹翁の和歌に、

ふりにける池の心は知らねとも今も聞ゆる水の音かな

と云ふ芭蕉の贊があるのか、此古池の水音は容易に聞かれぬ天籟ぢや

が、多分誠拙禪師の爐鞴に入つたので解つたのぢやらう。一圓相の上に、

我こゝろうちかへし見よ天地は空しき外にきく聲もなし

と題した和歌があるのか、それは隻手音聲の公案を透つた時の投機の偈と云てもよからう。景樹翁の居士名を在焉と云ふのか、それはこゝにも在る、こゝにも在る、こゝにも在ると云ふ意味で、流石に誠拙禪師の付けられたゞけに餘程面白いナ。

眼は花紅葉が見える、口は鯛や鱧が食へる、鼻は名香を嗅ぐ事が出來る、其他手でも足でもそれ〳〵樂みはあるが、臍に至つては一番つまらぬ役廻りぢや。いつも帶の下の眞闇がりに蟄居させられて、明みへ出るのは只風呂へ這入る時ばかり、雷が鳴るとて心配したり、膓加答兒が起つたとて痛い目したり、日々碌な事は無いにも拘はらず、住めば都と晏然として居る。丁度京都の人間も此臍のやうに引込思案ばかりして少しも進取活動の氣象がなく、萬事住めば都と諦めて居る樣子ぢやが、これでは眼や鼻は勿論ずつと下の睾丸にまでも笑はれはせまいかと思ふよ、アハヽヽ。

四十四、禪宗の四十六流

禪宗の二十四流と云ふのは誰でも知つて居るが、四十六流傳來の系圖は知る者極めて稀れぢや。これは小僧は勿論、大僧にも知らせて置きたいので、此間「禪宗記」者にも一寸書いて送つて置いた。併し廿四流も此四十六流も今は名ばかりで、眞個の正流正脈は纔かに關山の一系存するのみぢや。妙心開山三百年忌(今よりも百五十年前)愚堂國師の香偈に、

廿四流日本禪、惜哉大半失其傳、關山賴有愚堂在、續焰聯芳三百年

と云はれた通り、此時代からも已に太半禪流が混流して居たものと見

えるテ其四十六流の系圖とはこんなものぢや。

四十六流系脈傳來の系圖を省く）

○臨濟十六世　京師、建仁明菴榮西禪師（虛菴懷敞の嗣）千光祖師
○曹洞十四世　越前、永平道元禪師（長翁如淨の嗣）承陽大師
●臨濟十五世　京師、草河勝林天祐思順禪師（北澗居簡の嗣）
○臨濟十七世　京師、東福辨圓圓爾禪師（無準師範の嗣）聖一國師
○同　奥州、圓福性才法心禪師（同上）
同　洛北、妙見堂道祐禪師（同上）宗覺禪師
●同　相州、建長兀菴普寧禪師（同上）
同　越後、玉泉了然法明禪師（同上）
●同　相州、圓覺無學祖元禪師（同上）佛光圓滿常照國師
○臨濟十六世　紀州、興國心地覺心禪師（無門慧開の嗣）法燈國師
●臨濟十七世　相州、建長蘭溪道隆禪師（無明慧性の嗣）大覺禪師
臨濟十六世　駿州、清見聖禪無傳禪師（荆叟如寶の嗣）
臨濟十八世　相州、勝樂東傳正祖禪師（笑隱大訢の嗣）
●同　相州、淨智大休正念禪師（石溪心月の嗣）佛源禪師
○同　相州、淨智無象靜照禪師（同上）法海禪師
同　信州、安樂樵谷惟仙禪師（別山祖智の嗣）
●同　京兆、建仁鏡堂覺圓禪師（環溪惟一の嗣）天圓禪師
○同　相州、建長南浦紹明禪師（虛堂智愚の嗣）圓通大應國師
同　相州、禪興巨山志源禪師（同上）
同　洛東、勝林圭堂瓊林禪師（虛舟普庫の嗣）
同　相州、建長西澗子曇禪師（石帆惟愆の嗣）

●同　京師、南禪一山一寧禪師(頑極行彌の嗣)妙慈洪濟國師

同　相州、建長東里弘會禪師(月潭智圓の嗣)

●曹洞十五世　相州、建長東明慧日禪師(直翁德舉の嗣)

●曹洞十六世　京兆、南禪東陵永興禪師(雲外雲岫の嗣)妙應光國慧海慈濟禪師

●臨濟十八世　相州、建長靈山道隱禪師(雪巖祖欽の嗣)佛慧禪師

●同　京師、建仁清拙正澄禪師(愚極至慧の嗣)大鑑禪師

●臨濟十九世　京師、南禪明極楚俊禪師(虎巖淨伏の嗣)佛日焰慧禪師

●同　京師、南禪竺仙梵仙禪師(古林清茂の嗣)

同　京師、長福月林道皎禪師(同上)普光大幢國師

同　相州、建長石室善玖禪師(同上)

○同　京師、建仁別傳妙胤禪師(虛谷希陵の嗣)

臨濟二十世　丹波、高源遠溪祖雄禪師(中峰明本の嗣)

同　壹岐、安國無隱元晦禪師(同上)法雲普濟禪師

同　京師、眞如明叟齊哲禪師(同上)

同　甲州、棲雲業海本淨禪師(同上)

○同　相州、建長古先印元禪師(同上)正宗廣智禪師

同　常州、清音復菴宗已禪師(同上)大光禪師

同　關西、義南菩薩(同上)

○臨濟十八世　京師、建仁中巖圓月禪師(東陽德輝の嗣)佛種慧濟禪師

臨濟廿一世　遠州、奥山無文元選禪師(古梅無友の嗣)

同　肥後、國泰以亨謙禪師(見心來復の嗣)
同　相州、建長大拙祖能禪師(千巖元長の嗣)廣圓明鑑禪師

○臨濟二十世　藝州、佛通愚中周及禪師(即休契了の嗣)佛德大通禪師

臨濟卅二世　宇治、黄檗隱元隆琦禪師(中峰明本十四世の孫)普照禪師

曹洞廿九世　常州、祇園興儔心越禪師(芙蓉道楷廿二世の孫)

右

二十四流

○南詢の十一師
●東渡の十三師

○(一)　明菴榮西　○(二)　永平道元　○(三)　辨圓圓爾

○(四)　心地覺心　●(五)　道隆蘭溪　●(六)　兀菴普寧

●(七)　大休正念　○(八)　無象靜照　●(九)　無學祖元

●(十)　一山一寧　○(十一)南浦紹明　●(十二)西澗士曇

●(十三)鏡堂覺圓　●(十四)靈山道隱　●(十五)東明慧日

●(十六)清拙正澄　●(十七)明極楚俊　○(十八)愚中周及

●(十九)竺仙梵仙　○(二十)別傳妙胤　○(廿一)古先印元

○(廿二)大拙祖能　○(廿三)中巖圓月　●(廿四)東陵永璵

二十四流略傳に云く、東里の會了然の明妙見の祐、天祐の順、樵谷の仙、東傳の祖、無隱の晦、明叟の哲は皆嗣なきが故に除く。復菴の已は四子一孫にして斷絶する故に除く。遠溪の雄、月林の皎は中世兒孫微なるが故に除く。以亨の謙、石室の玖、無文の選は兒孫ありと雖も、官刹に住せざるが故に除くとあり。

官刹とは五山十刹を云ふ乎、然れども石室の玖は、前にも記する如く、建

長の住持なり。建長住山は、右廿四流略傳編輯以後のことならんか。無文元選の奥山も、維新前は官刹なり。

性才ノ心、聖禪ノ傳、巨山ノ源、勝林ノ林、業海ノ淨、關西ノ南、隱元ノ琦、興儁ノ越の八師は、一切に論なし云々とあり。

四十五、禪とは什麼生

老師を訪うて禪とはどんなものかと問うた。丁度雨の降る日で、障子の外の軒端に、ポッ〳〵點滴の音がする。老師は靜かに薄茶を立てゝ、夜の梅を出して呉れられる。

「雨が降ると欝陶しいナ、禪とはそれ彼の點滴を聽いて居ると、仕舞に點滴が我か、我が點滴かと云ふ、無我の境に入る之れが禪だ、解たかナ。ナニ新年か、新年とは何ぞ、我宗には過去も無し、現在も無し、未來も無し、況むや新年をやだ。眞空の又眞空ぢや。今日も大阪の新聞記者が、佛敎に現はれた羊の談をして呉れよと賴みに來たが、禪語には、羝羊籬に觸るとか、佛典中に羊車、鹿車、牛車など云ふ語もある。又蒙求に、仙人が荒野の石を杖頭で指點すると、皆それが羊に化したと云ふ故事もあるナ。ナニ有形上の禪宗の將來か、アハヽ。それは寺も坊主も悉皆無に歸して仕舞うよ、いや最う無に歸して居るのぢや。

三千世界を空巢と見做し獨り朝寢がして見たい

四十六、達磨峰の一句

臘八の前數日、默雷老師を建仁寺の草庵に訪ふ。默雷即ち談雷、爐邊に兀座して茶話盡きざること數千言、晷移て爐火の紅葉已に冷かなる白雪となるをも知らず。

大分寒くなつたナ、歳寒うして心の貧なるを覺ゆ。もつと爐邊へお寄り、蒲茶を上げようかナ。喫茶去。これも一つの公案ぢや、什麼ぢや、骨折つて居るかナ。最う臘八も數日の中に近いて來た。臘八には禪堂に坐つて十分骨を折るが好い。臘八とはナ、釋迦が東方に明星の紫に輝くのを見て、大悟徹底せられた日ぢや。それで十二月の朔日から八日までを聖きー日と看做して、一睡もせずに接心をする。此寺は新曆ぢやから未だ寒くなくて凌ぎ易いが、田舍寺の舊曆では寒い。併し寒に處して寒を忘れる、所謂、

禪楊夜闌冷於鐵。　半窓月帶梅花來

とは此臘八の心境ぢや。

臘八の間を長坐不臥と云つて、學者が間斷なく參禪に來る。いはば百萬の魔軍が鬨を揚げて襲來するが如し、之に當る神將は衲が一人ぢや。兎の毛の油斷も隙もあつたものぢやない。獅子一吼――百萬の魔軍を敵手にする、貴郎などの獨參の仕方は、恰で遠矢で戰爭して居るやうに思ふが什麼ぢや。單刀直入、驀然として王陣に迫つて來ねば駄目ぢや。遲臭い。劍去て久しと云ふ遣り方ぢや、アハヽヽ。

冬籠る默雷さんや建仁寺

私はこんな俳句を作りましたがと云ふと、アハヽヽ、說不說と云ふ處を咏んだのかナ。衲も今日一句唸つて見た、それは、

面壁の姿に似たり雪の比叡

と云ふのぢや。達磨の畫賛ぢやが解るかナ。彼の比叡山を紫野大德寺邊りから望むと達磨面壁の姿に見える。それで比叡山を達磨峰と稱して居る、此句は比叡山を雪達磨に看做した句ぢや。

四十七、建仁寺十勝

此建仁寺には、十勝と云ふのがある。それは、足利將軍が東山へ上つて眺望せられたと云ふ慈視閣、それから大悟堂と云ふ道場群玉林と云ふ學林、禪居の無盡燈、今も殘存して居る境内の蓮池が洗鉢池、山門の望闕樓、開山の入定塔、大燈國師が道行く人を深山木と觀せられた五條橋、加茂川の水、清水山、之を建仁寺の十勝と云つたが、今日は已に大半空に歸して居る。其蒼茫たる空中に舊時の壯觀を描いて此十勝を俳句に咏めば什麼か、衲も咏むで見る積りぢや。

床間に手に經卷を持てる文殊の畫軸あり。耳を傾けて亦老師の茶話を聽くものゝ如し。老師指して曰く、あれは苦を樂と觀じ、樂を苦と觀ぜる、顚倒の人界を正さんとする清涼の文殊ぢや。

臘八に近し文殊の像掛けて

か、アハヽ。いや翌日から出山の釋迦の像と掛替へる積りぢや。其前に在るのは、俗に蛸脚の香爐々々と呼むで居るが、實は鳳凰に象つたものぢや。彼の八脚のやうなのが即ち鳳凰の翼ぢや。

此頃東京では碧巖會を組織して居るさうだが、天下の大政いや我が京都の市政に與る人々にも、大いに此禪味に染指して貰ひたいものだ。併し之を毒使惡用されたら困るが、兎に角英雄豪傑などには、生れながらにして禪機があるよ。衲は彼の亞拉比亞のマホメットには大いに禪機があると思つて居る。冷々頑石の如く默することは數十年、一たび起てば風雲を叱咤して其勢ひ端睨すべからざる概がある。殊にコーランか劍かと絶叫した處は、這裡活殺の利劍と一般ぢや。此利劍を眞向大上段に振り翳して、宇宙を粉碎し、乾坤を微塵にし、釋迦を殺し、達磨を殺すに